



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基礎的研究
Author(s)	有吉, 洸
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士(工学)
Issue Date	2011-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52043
Type	bachelor thesis
File Information	thesis_ariyoshi.pdf





インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基礎的研究

A Basic Study of Personalization in the Internet Cafe

【目次】

第 1 章 目的と背景

1-1. 目的と背景

1-2. 既往研究

第 2 章 札幌市におけるインターネットカフェの空間的特徴

2-1. 調査対象

2-2. 調査方法

2-3. 物理的実態と分類

第 3 章 利用実態調査

3-1. 調査概要

3-2. 分析の方針

1) 椅子の種類

2) 出入口の位置

3-3. 分析結果と考察

3-3-1. 身体的制限

3-3-2. 心理的制限

1) 出入口付近の物品の配置について

2) 貴重品の位置について

第 4 章 まとめ

第 1 章 目的と背景

1-1. 目的と背景

近年の日本では、若い世代を中心にインターネットカフェで一晩を過ごすという新しい就寝のスタイルが市民権を得つつある。

インターネットカフェとは、『有料でインターネットにアクセスできるパソコンを利用できる施設』であり、『漫画喫茶の付属設備のひとつとしてインターネットが利用できるパソコンの導入が進められた』結果誕生した（wikipedia フリー百科事典「インターネットカフェ」より引用）。

多くの店舗が24時間営業を行っており、インターネット・テレビ・ゲーム・漫画・雑誌といったコンテンツを利用することができる。また、ブランケットやクッションの貸し出し、シャワールームの設置を行っている店舗も多く、比較的安い料金で一晩を過ごす事が可能なことから、仕事や趣味・娯楽を目的とした利用に加えて、ビジネスマンや旅行客、就職活動中の学生などがホテルに宿泊する代わりに利用するケースも見られる。そのため、いわゆる「ネットカフェ難民」の問題が盛んに議論された時期もあったが、現在では「インターネットカフェで一晩を過ごす」という行為は一つの社会現象の域を超え、日常的な施設利用のスタイルとして定着している。

インターネットカフェの施設種は基本的に飲食店だが、その営業形態の特性から、「風俗営業等の規制及び業務の適正化に関する法律」の規定する「風俗営業」に該当する可能性がある。

『「風俗営業」とは、次の各号のいずれかに該当する営業をいう。（中略）六 喫茶店、バーその他設備を設けて客に飲食をさせる営業で、他から見通すことが困難であり、かつ、その広さが五平方メートル以下である客席を設けて営むもの』（「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」第一章 第二条より引用）

風俗営業に該当した場合、営業時間を始めとする様々な制約が生じる。そのため多くのインターネットカフェでは、制約を回避するために、店舗の仕様や提供するサービスにいくつかの制限を加えている。例えばインターネットカフェのブースは1.5～2.0㎡程度の広さのものが一般的だが、これを壁で仕切って完全な個室にすると上記の風俗営業に該当するため、多くの場合は人の背丈程度のパーティションによって仕切られている。またブースの出入口のドアも、窓の付いた物や、下半分が空いている物など、外から見通す事が可能な形状のドアが使用され、施錠もできないようになっている。

このようにインターネットカフェで提供される環境・サービスは、通常のホテルのように宿泊を前提としたものにはなり得ない。そのような状況のもとで、各自が居場所や寝場

所を成立させるには、提供される空間に対して積極的に工夫を行い、プライバシーの確保される個人的な領域を構築する必要があると考えられる。

そこで本研究では、インターネットカフェのブース内に形成されていると予想される個人的領域を研究対象とし、まずブースの物理的な実態と特徴を把握し、さらに実際の利用における具体的なブースの使われ方を分析することによって、インターネットカフェにおける個人的領域の形成に関する基礎的な知見を得ることを目的とする。

1-2. 既往研究

領域に関する既往研究には、子供病室における家具のレイアウト実験を扱った今井らの研究¹⁾、個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域を扱った橘らの研究²⁾、自然災害に伴う環境移行を扱った三浦らの研究³⁾、住居における家具配置と生活領域を扱った木原・橋本らの研究^{4) 5)}、オフィスにおける個人作業領域を扱った花田らの研究⁶⁾などがある。

今井らの研究は、病院などの療養環境における個室化が注目されている現状において、病室内の家具レイアウトと、そこで実際に生活する患者の空間に対する意識を、テリトリーやプライバシー・コミュニケーションの視点から評価することで、多床室が抱える課題解決の糸口を見出し、病室のようにそこで様々な行為が行われる単位空間を計画する際の計画的指針を明らかにしようと試みている。

具体的には、小児慢性疾患患者の入院する小児専用病棟を調査対象とし、病室の家具レイアウト実験とヒアリング調査を行い、入院患者のテリトリーを分析することで、個人が他者とどのように接しようとしているのか、または接することを回避しようとしているのかを読み取り、プライバシー・コミュニケーションの意識と物的環境との関係性を分析している。その際、患者自身も自覚していない潜在的な占有意識が、家具のレイアウトやカーテン使用の有無、物品の置き場所といった非固定の物的環境に表れてくると仮定している。

この家具レイアウト実験とヒアリング調査から今井らは、各実験期間に1週間という限界があり、テリトリーが必ずしも安定した状態にまでなっていなかった可能性はあるものの、日常の状況を観察するだけでは直接把握することの出来ない様々な場面を抽出し、プライバシー・コミュニケーションへの要求あるいは対応の一部を明らかにしている。

橘らの研究は、急速に高齢化が進行する状況の中で、高齢者の介護と生活の場を兼ね備えた特別養護老人ホームに注目し、在宅における安定した環境から、施設という新しい環境への危機的移行に際して、居住者が居室内に家具や物品を持ち込んで独自の環境を形成する過程と、居住者にとっての居室環境の意味を分析することにより、人と環境との相互浸透関係を、個人的領域の形成という概念によって捉えようと試みている。

具体的には、個室型の特別養護老人ホームを調査対象とし、居室内の家具・物品の量的な特性を捉えるために、実際に利用されている居室の図面を採取し、居室内の家具・物品の点数を記録するとともに、入居者の行動観察を行っている。さらに、居室内における領域形成を質的に捉えるために、入居者に対して、居室内に家具・物品を持ち込んだ過程・意味などのインタビュー調査を行っている。

これらの調査から橘らは、入居者にとっての居室内の物品の持つ意味・役割について、「空

間的働きかけ」「個人的活動」「社会的関係性」「時間的關係性」という4つの側面を見出している。そしてこの4つの側面から居室内の個人的領域の形成について、人間と環境は物を媒介とした一つのシステムを形成しており、物を介して環境への働きかけを行うと同時に、そのフィードバックを受けるというサイクルを繰り返すことによって、入居者が居室環境の意味付けを行い、自己のアイデンティティを再構成しながら、自分の居場所として安定した環境を得てゆく過程を明らかにしている。

三浦らの研究は、1993年7月に発生した北海道南西沖地震に伴う津波を起因とする自然災害による生活拠点の移動を不可避の環境移行と捉え、自然災害によって崩壊した人間環境系の平衡状態に対して、人が環境とどのように相互作用し、新しく安定した相互関係を構築してゆくのかを、領域の形成という環境行動的視点から明らかにしようと試みている。

具体的には、北海道南西沖地震に伴い、奥尻島青苗地区および初松前地区に建設された応急仮設住宅・災害復興住宅・自己再建住宅を調査対象とし、実際の住宅に赴き、住まいになにがどのように置かれているのかを詳細に把握・記述するとともに、個別の被災体験を注意深く記述するための居住者に対するヒアリング調査を1994年から1996年までの3年間に渡って行っている。またその際、仮設住宅・公営住宅・自己再建住宅という一連の住宅復興プロセスの中で、領域がどのように形成されるかを分析している。

これらの調査から三浦らは、避難所での集団生活の中では、少しでも個人的な領域を確保しようとする行為が見られるが、それが仮設住宅に移り個人的空間がある程度確保されるようになると、生活に必需の行為を始めとする幅広い行為が見られるようになり、さらに恒久的な公営住宅・自己再建住宅になると、より強く周囲の環境に働きかける行為が見られるようになることから、領域の形成過程が段階的な構造を持つことを指摘している。そして、領域は単に時間の経過とともに形成されてゆくだけではなく、個人的な空間の有無とその面積、住宅の所有形態といった物理的な環境の在りようと、それを受けた住み手の居住への意思によって規定されることを明らかにしている。

木原・橋本らの研究は、世帯数の増加と世帯規模の縮小化が進む近年において、そのようなライフスタイルの変容に伴う住宅の間取りの変化を背景に、単室の広さを重視し、室内が壁などによって仕切られていない住宅を「ワンルーム型住居」と定義し、ワンルーム型住居で実際にどのような生活行為が展開されているのかを、行為と家具配置との関係性という視点から考察しようと試みている。

具体的には、都市居住者のライフスタイルを含めた新しい提案及び間取りが見られる都市型集合住宅を調査対象とし、調査対象住宅の居住者に対してアンケート調査、ヒアリン

グ調査を行い、現在の住居の評価や空間分節、モノ・生活行為の分散、しつらえに対する考え方などを調査している。同時に、1/50の住居の図面を用意し、しつらえの記入、家具の寸法測定、内部写真の撮影などを行っている。

これらの調査から木原・橋本らは、住居の中には「寝る領域」「くつろぐ領域」「食べる領域」「集う領域」「仕事の領域」という5つの領域があり、小さい住居では複数の領域が重複しているが、住居が広くなるにつれてまず「寝る領域」が分離し、続いて「食べる領域」が分離する傾向があるということ、領域の分散の仕方は、居住者がどのような生活行為を優先するかによって変化するという、などを明らかにしている。そしてこれらの実態から、領域の重複と分離のプロセスに関する法則が存在する可能性を指摘している。

花田らの研究は、今後の増加が予想されるノンテリトリアルオフィスにおける領域の重要性に注目し、インターバル撮影画像解析システムの開発と適用を通して、オフィスにおける執務者の行動特性を領域という視点から考察することで、物理的環境と個人作業領域の決定要因の関係性を明らかにしようと試みている。

具体的には、『机上面に配置された物は領域を示すサインとしての役割がある』という仮説に基づき、開発した個人作業領域解析システムを用いて、臨席同士で机面を共有するデスクシステムにおける個人作業領域を、臨席との境界が明確に示された環境である「パーティションあり」、臨席との境界が不明確な環境である「パーティションなし」、ノンテリトリアルな環境である「フリーアドレス」という3つの形態で定点観測する実験を行っている。

これらの実験から花田らは、個人作業領域の決定には境界の区切られ方が大きく影響を及ぼすこと、フリーアドレス環境では固定席環境に比べてより動的で広がりのある領域が見られることなどを明らかにしている。そしてこれらの知見をもとに、執務者の行動特性を理解する上で、領域という視点の重要性を指摘している。

今井らの研究は、1週間で形成された領域を、橘、三浦、木原・橋本らの研究は、半年から3年という比較的長い時間をかけて形成された領域を扱ったものである。これらの研究以外にも居住施設における入居者の個人的領域や、環境移行による領域の変化を扱った研究はいくつかあるが、対象とする領域は、ある程度時間をかけて形成された物である場合が多い。

これに対し、インターネットカフェのブース内に形成される個人的領域は、数時間という比較的短い期間で形成され、利用終了とともに元の状態に戻される一時的なものである。そのような仮設的領域であるにも拘らず、そこではしばしば就寝という非常にプライベート性の高い行為が成立している。よってこのような特徴を持つ領域を研究対象とすると、

ブースの利用者がより積極的に、工夫して与えられた環境を使いこなそうとしている事例を観察できる可能性が高い。この点にインターネットカフェを研究対象とする意義がある。

また本研究では花田らの研究を参考に、ブース内に配置された物品・場所を動かした備品が領域を示すサインとしての役割を果たしていると仮定し、ブース内に配置された物品によって構築されている物理的環境、「パーソナライゼーション」を分析することにより、どのように個人的領域が形成されているかを捉えようと試みた。

なお、ここではパーソナライゼーションという概念を、

(i) 物品に個人のパーソナリティを帯びさせる行為自体

(ii) (i) の行為の結果構築されている物理的環境

であると定義した。

第 2 章 札幌市におけるインターネットカフェの空間的特徴

2-1. 調査対象

本研究では札幌市内のインターネットカフェを調査対象とし、『全国ネットカフェ・漫画喫茶一覧』(<http://www.cafeman.jp>)に掲載されている店舗を抽出した。その結果札幌市内には、中央区:12、北区:3、東区:3、白石区:2、厚別区:4、豊平区:0、清田区:3、南区:1、西区:1、手稲区:2の合計31店舗があることが分かった(図1)。

そこで、調査対象の物理的な実態を把握するために、抽出した31店舗のインターネットカフェについて実地調査を行った。

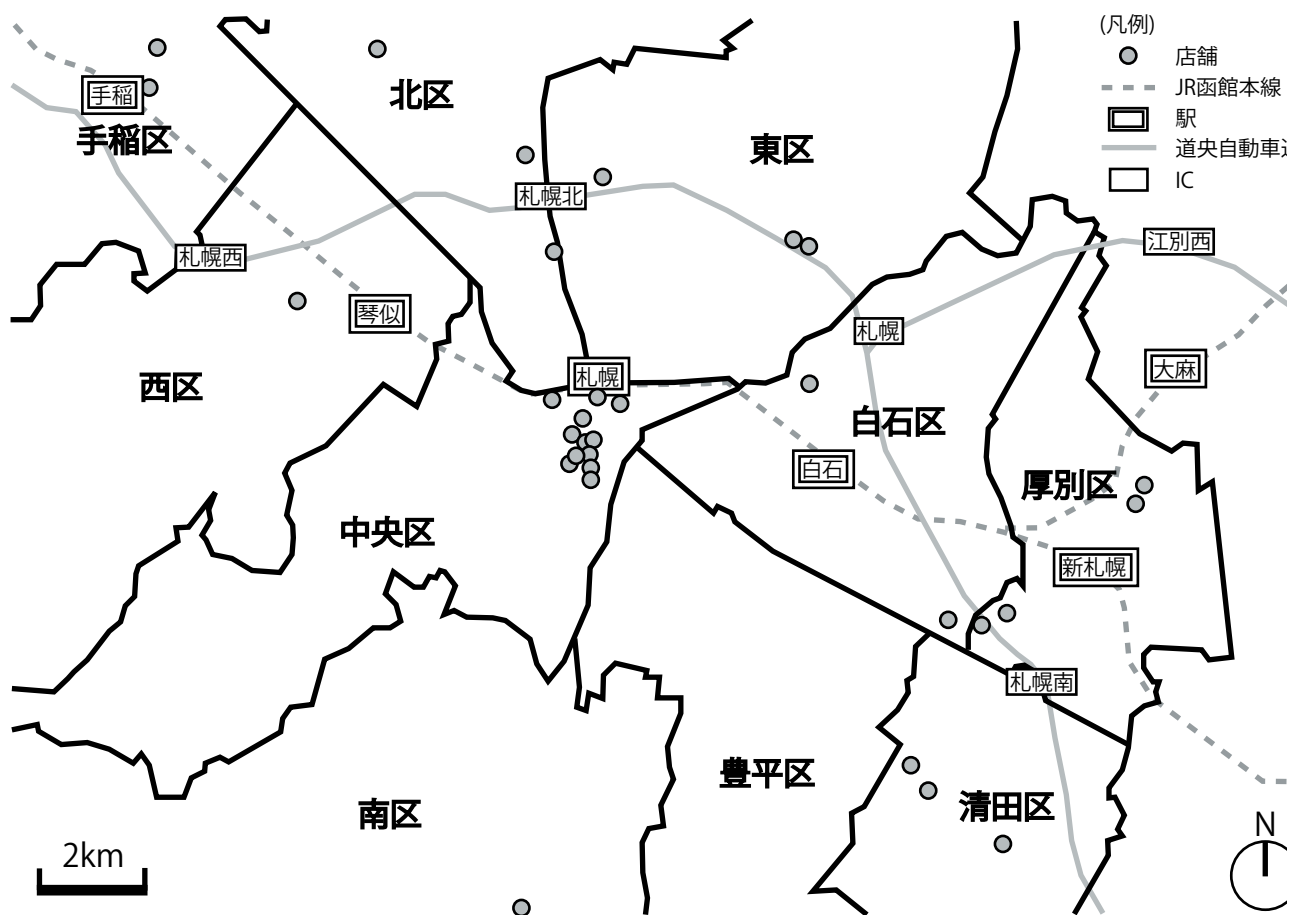


図 1. 調査対象の分布

2-2. 調査方法

- ・調査期間は 2010 年 6 月 22 日 (火曜日) ～ 11 月 2 日 (火曜日) とした。
- ・調査対象の店舗を実際に利用して、その店舗にあるブースの物理的実態を調査した。
- ・ブースの幅、奥行き、パーティションの高さなどの各種寸法を測定し、備品の位置などを記録した。

2-3. 物理的実態と分類

調査の結果、札幌市内におけるインターネットカフェのブースは、大きく「リクライニング」「フラット」「デスク」「ソファ」「マッサージ」「フラットシート」「プレミアム」の7種類に分類できるという事が事が分かった。

「リクライニング」型のブースは、背もたれを倒す事が出来るリクライニングシートをブース内に設置したタイプである。市内のインターネットカフェ 31 店舗全てがこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 2.29 m²、パーティションの高さの平均は約 1619mm である。

「フラット」型のブースは、ブース内が小上がりになっている、あるいはマットが敷かれているタイプで、基本的には靴を脱いで利用する。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 30 店舗がこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 2.51 m²、パーティションの高さの平均は約 1529mm である。

「デスク」型のブースは、「リクライニング」型とほぼ同様の仕様で、リクライニングシートの代わりにオフィスチェアを設置したタイプである。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 9 店舗がこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 1.86 m²、パーティションの高さの平均は約 1544mm である。

「ソファ」型のブースは、ブース内にソファを設置したタイプであり、店舗によって 1 人用・2 人・用 3 人用などがある。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 19 店舗がこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 3.04 m²、パーティションの高さの平均は約 1728mm である。

「マッサージ」型のブースは、ブース内にマッサージチェアを設置したタイプである。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 14 店舗がこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 2.48 m²、パーティションの高さの平均は約 1612mm である。

「フラットチェア」型のブースは、基本的には「フラット」型に近いが、一部の仕様が異なり「フラット」型に分類できないタイプのブースの総称とする。具体的には「フラット」型のブース内にさらに背もたれをほぼ水平に倒す事が出来るフルフラットベッドシートを設置したブース、および靴を履いたまま小上がりに腰掛けて利用するブースの 2 種類が該当する。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 4 店舗がこのタイプのブースを採用

している。ブースの面積の平均は約 2.07 m²、パーティションの高さの平均は約 1320mm である。

「プレミアム」は、やや広めで、同じ店舗内の他のブースとは仕様の異なる家具・備品が設置されていて、かつ店側が特別な名称を与えているものを指す。市内のインターネットカフェ 31 店舗中 4 店舗がこのタイプのブースを採用している。ブースの面積の平均は約 3.10 m²、パーティションの高さの平均は約 1700mm である。

なお、これら以外にも店舗によっては、複数人での利用に限定した「ファミリールーム」「シアタールーム」、パーティションを設置していない「オープン席」「オープンマッサージ席」などが設置されている。

以上を表 1 にまとめた。

また対象とした店舗のほぼ全てが、「リクライニング」型と「フラット」の 2 種類のブースを採用していることが分かった。さらに、「リクライニング」型ブースと「フラット」型ブースには、机がブースの入口側に設置されているタイプと、奥側に設置されているタイプがあることが分かった。そこで本稿では便宜上、前者を A 型、後者を B 型と呼ぶことにした。なお、これら 4 種類のブースの数がほぼ同数であったことから、本稿では「リクライニング A 型」「リクライニング B 型」「フラット A 型」「フラット B 型」を札幌市内のインターネットカフェにおける基本的なブースとして位置づけた(図 2)。

表 1. 各種ブースの平均寸法

タイプ	幅(mm)	奥行(mm)	パーティション(mm)	面積(m ²)
リクライニング	1136.9	2015.4	1618.9	2.29
フラット	1242.5	2019.2	1528.8	2.51
デスク	1078.5	1726.0	1544.0	1.86
ソファ	1712.5	1773.7	1727.9	3.04
マッサージ	1030.8	2194.4	1611.7	2.48
フラットチェア	1065.0	1940.0	1320.0	2.07
プレミアム	1667.5	1857.5	1700.0	3.10

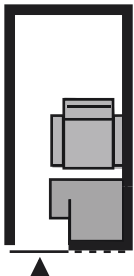
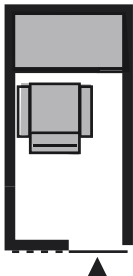
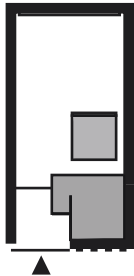
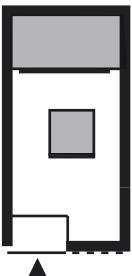
リクライニング		フラット	
A 型	B 型	A 型	B 型
			
採用店舗 12/31	採用店舗 16/31	採用店舗 13/31	採用店舗 14/31

図 2. インターネットカフェの基本的なブース

第 3 章 利用実態調査

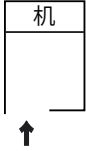
3-1. 調査概要

実地調査で得た 4 タイプのブースの利用実態を把握するために、実験的な利用による利用実態調査を行った。

【調査概要】

- ・調査期間は 2010 年 10 月 26 日 (火曜日) から 11 月 9 日 (火曜日) とした。
- ・調査対象は、ブースの面積とパーティションの高さが同程度のものを抽出し、表 2 に示す 4 つのブースに決定した。
- ・被験者は北海道大学の学生 8 人 (男性 4 人、女性 4 人) とした。
- ・被験者には 1 人につきランダムに 2 カ所のブースを割り当てた。
- ・被験者には実際にそのブースで一晩過ごしてもらった。
- ・利用中にブース内のどこに荷物を置いたか、どこに備品を動かしたかなどについて記録用紙に記入し、同時に写真を撮影してもらった。
- ・記録する場面は、「利用開始直後」「安定状態 (利用を開始してから 1 時間が経過した状態とする)」「シャワー室利用中 (長時間席を外す時)」「仮眠時 (仮眠をとる直前)」の 4 場面とした。
- ・シャワー室が店内に設置されていない「自遊空間アーバン札幌店」を利用する被験者には、30 分以上ブースの外で過ごしてもらい、「長時間席を外す時」とした。
- ・調査の結果、合計 16 の利用実態が得られた。

表 2. 利用実態調査対象の基本情報

タイプ		店舗	幅	奥行き	パーティション	面積
A型 	リクライニング	自遊空間 アーバン札幌店	1050mm	2150mm	1530mm	2.26㎡
	フラット (けあげ)	自遊空間 南2条店	1040mm	2180mm	1510 (+240)mm	2.27㎡
B型 	リクライニング	ゲオカフェ 狸小路店	1150mm	2000mm	1610mm	2.30㎡
	フラット (けあげ)	コミックランド 時計台店	1070mm	2000mm	1650 (+250)mm	2.14㎡

3-2. 分析の方針

ブース内に形成される個人的領域の傾向を分析するにあたって、利用実態調査を行った4つのブースが持つ空間的な特徴に注目する。

1) 椅子の種類

対象としたブースには「リクライニング」型と「フラット」型の2種類があり、椅子に座った状態で過ごす場合と、平らな床の上で過ごす場合とでは、動く事の出来る範囲や姿勢の取り方といった、行動の自由度に対する身体的制限の度合いが異なる。そのため、形成される個人的領域にも差異が生じると考えられる。

これを踏まえて、身体的制限の程度差によって生じるパーソナライゼーションの傾向の違いについて分析する。

2) 出入口の位置

対象としたブースには「A型」と「B型」の2種類があり、万が一の場合に他人の侵入が予想される方向がそれぞれ異なる。そのため利用者の前方に出入口がある場合と、無防備な後方に出入口がある場合では、利用者の心理面に与える影響が異なり、パーソナライゼーションの傾向に差異が生じると考えられる。

これを踏まえて、心理的制限の程度差によって生じるパーソナライゼーションの傾向の違いについて分析する。

また分析する場面については、利用実態調査の対象である4つの場面の中で、「就寝」という行為を成立させるのが、一般的には最も困難であり、利用者の環境に対する働きかけが最も顕著になると考えられるため、「安定状態」と「仮眠時」を選択し、両者を比較しながら分析を行う（図3）。

		リクライニング				フラット				
		事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8	
A型	安定状態									
	仮眠時									
		事例9	事例10	事例11	事例12	事例13	事例14	事例15	事例16	
B型	安定状態									
	仮眠時									
		私物				備品				
		1:鞆(主) 2:鞆(補助) 3:紙袋 5:携帯電話 11:財布 12:靴	13:コート 14:上着 15:傘 16:腕時計 21:記録用紙 22:筆記用具	25:カメラ 26:眼鏡 27:眼鏡ケース 30:煙草 34:イヤホン 36:ストール	37:マフラー 38:コンタクト 39:鍵 40:ネックレス 41:ネクシュ 42:化粧品	43:資料 44:本 50:タオル 53:洗面用具	4:伝票 6:ひざかけ 7:コップ 8:カップ 9:漫画 10:雑誌	17:椅子 18:足置き 19:座椅子 20:座布団 23:引き出し 24:スリッパ	28:キーボード 29:ディスプレイ 31:灰皿 32:ゴミ箱 33:メニュー 35:ヘッドホン	35:ヘッドホン 51:袖机 52:メモ帳 54:カップ麺

図 3. 利用実態調査結果 / 安定状態・仮眠時

3-3. 分析結果と考察

3-3-1. 身体的制限

身体的な制限が形成される個人的領域に及ぼす影響を捉えるために、「リクライニング」と「フラット」を比較し、考察を行う。なお、身体的な制限・行動の自由度に対する制限の影響は、主に物品が配置される範囲に表れると考えられる。

「リクライニング」型の場合、事例 1、2、3、4、9、11、12 については配置範囲に変化が見られず、むしろ机を中心とした一定の範囲内に物品を配置し、限定的な領域を構築している。安定状態から仮眠時に移行する際に、物品の配置される範囲が拡大しているのは事例 10 のみである（図 4～図 11）。

一方「フラット」型の場合、全ての事例において、安定状態から仮眠時に移行する際に、物品が配置される範囲の拡大が見られる。事例 5、6、16 では、安定状態から仮眠時に移行する際に、物品の配置範囲がブースのおよそ半分まで物品の配置が広がっている（図 12～図 14）。またそれ以外の事例 7、8、13、14、15 では、安定状態から仮眠時に移行する際に、ほぼブース全体に物品の配置範囲が広がっている（図 15～図 19）。

これらのことから、「リクライニング」型のように行動の自由度が低く、身体的制限が比較的大きい状況では、椅子の周囲に限定的な個人的領域が構築され、逆に「フラット」型のように行動の自由度が高く、身体的制限が比較的小さい状況では、個人的領域の範囲が広がる傾向があると考えられる（図 20）。

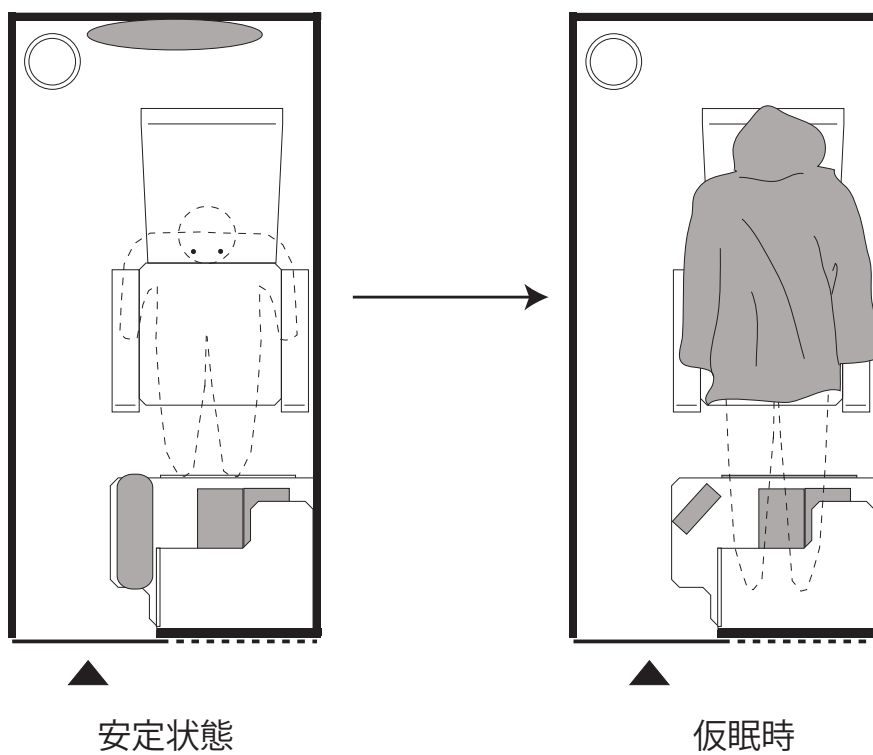


图 4. 事例 1：身体的制限大・限定的

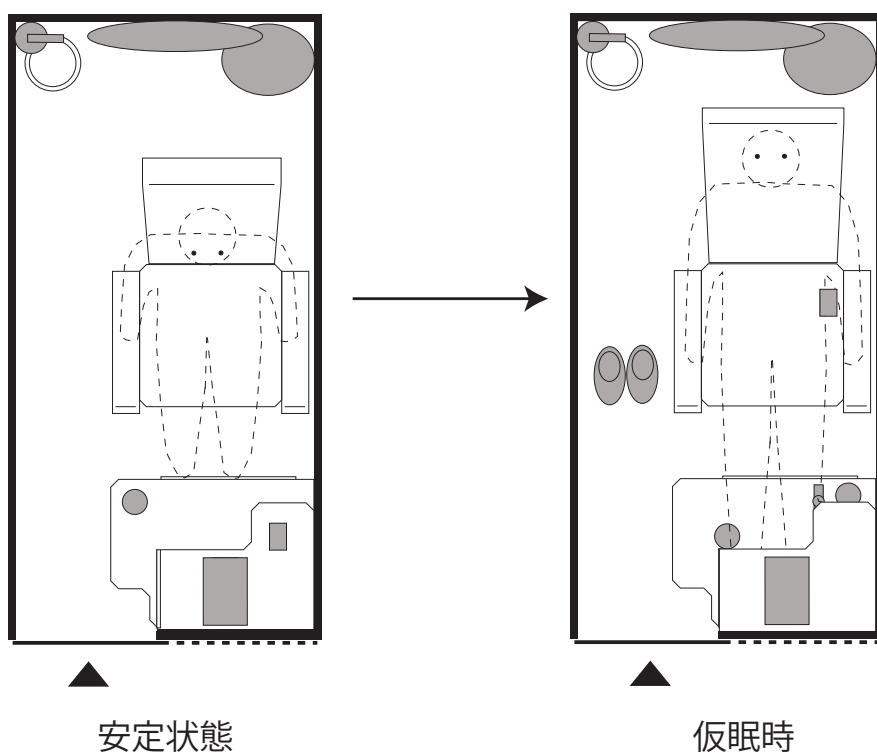


图 5. 事例 2：身体的制限大・限定的

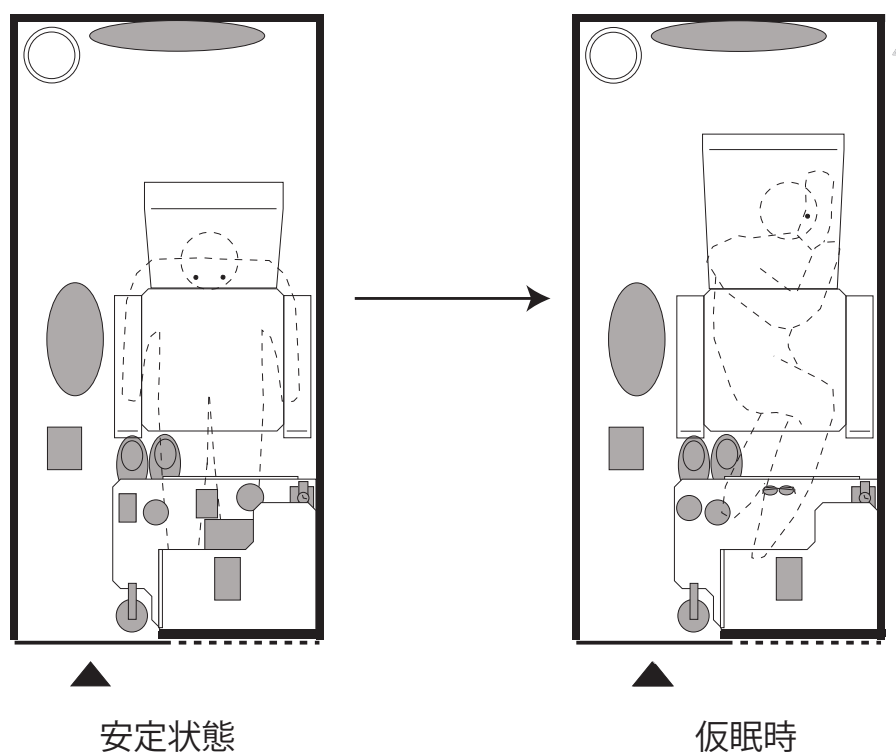


図 6. 事例 3：身体の制限大・限定的

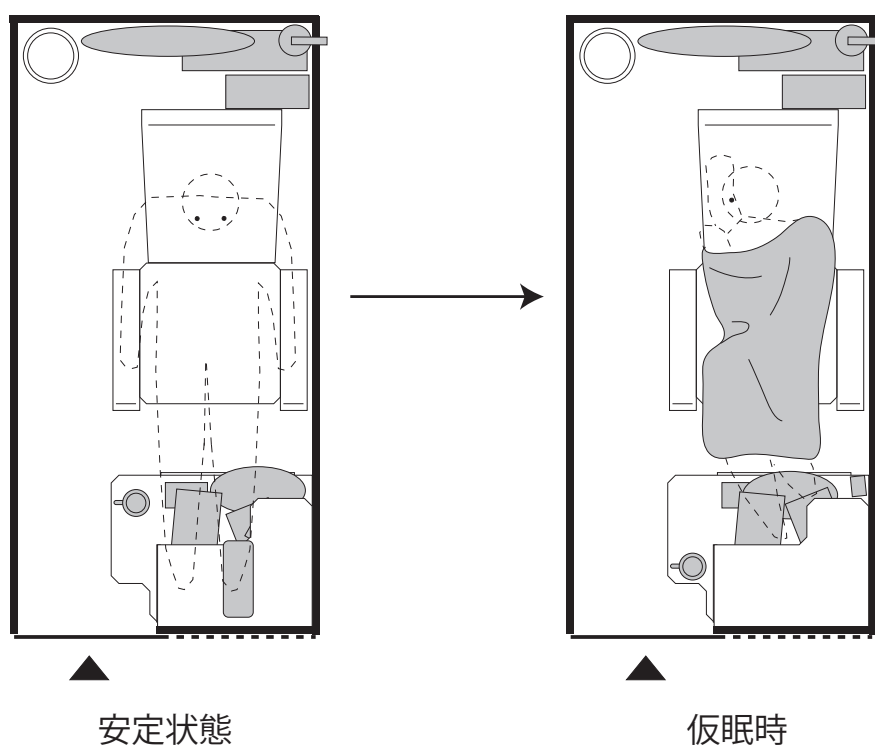


図 7. 事例 4：身体の制限大・限定的

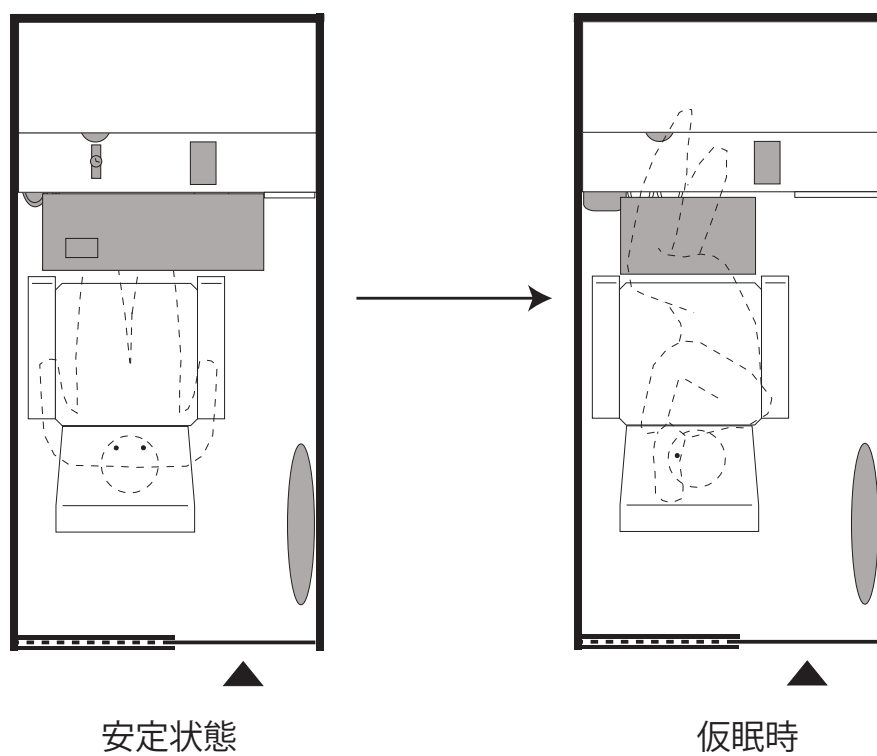


図 8. 事例 9：身体の制限大・限定的

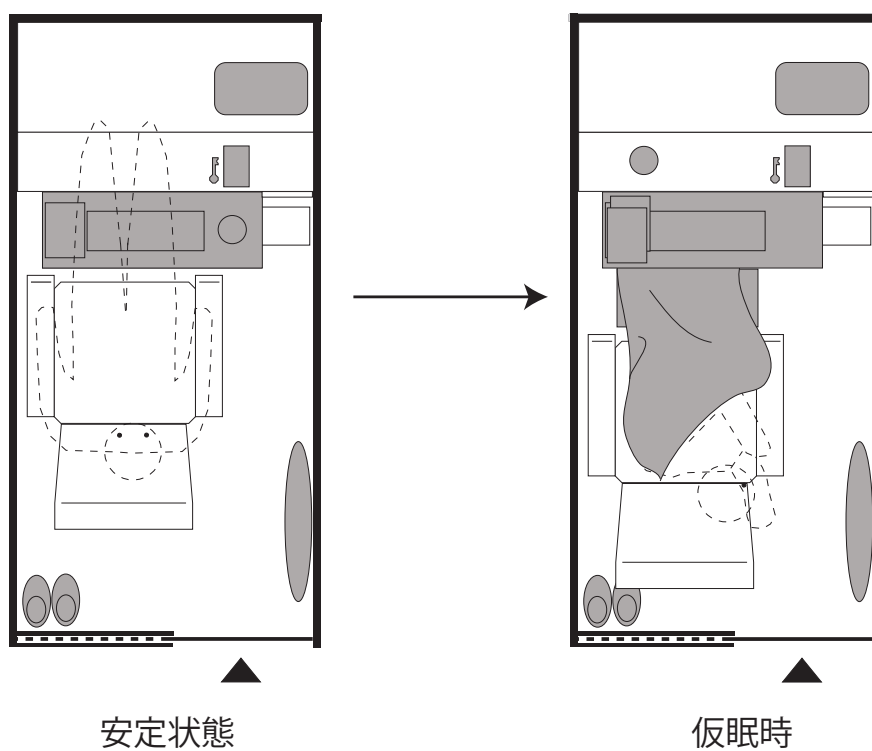


図 9. 事例 11：身体の制限大・限定的

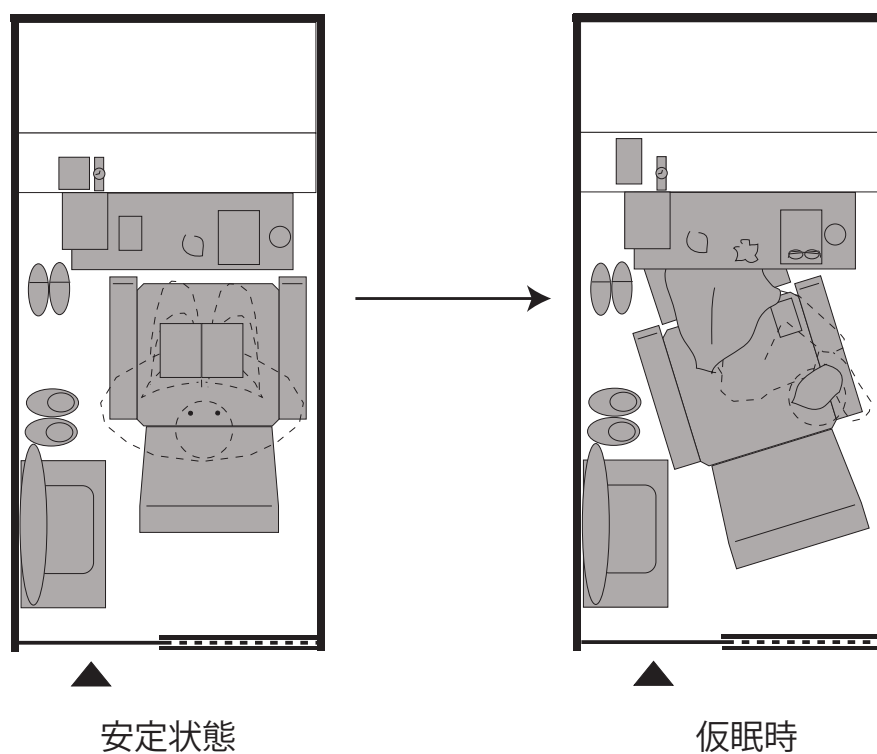


図 10. 事例 12：身体の制限大・限定的

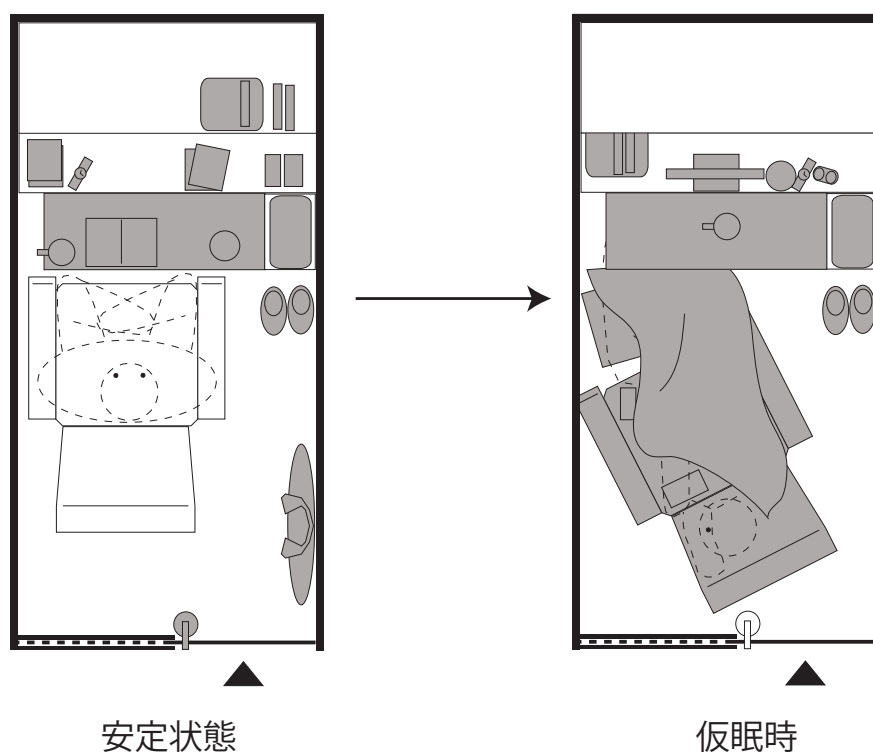


図 11. 事例 10：身体の制限小・範囲拡大

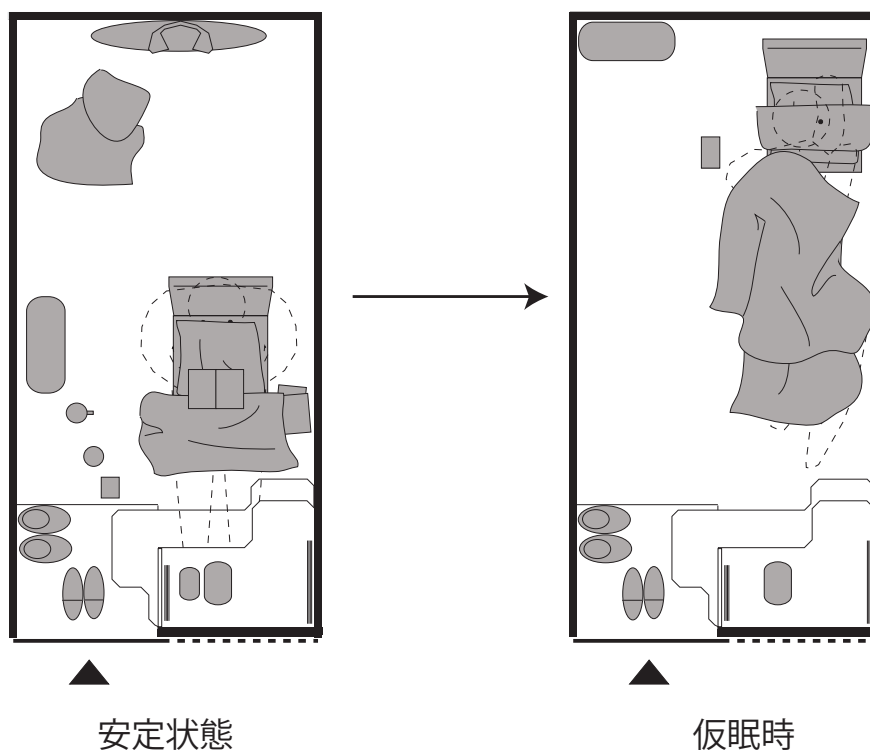


図 12. 事例 5：身体の制限小・範囲拡大

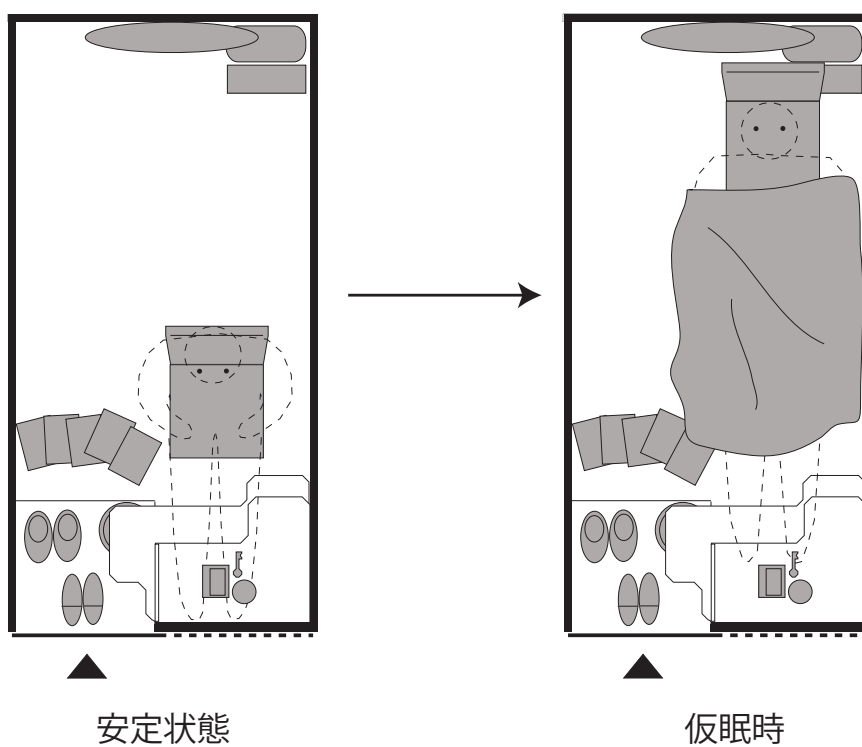


図 13. 事例 6：身体の制限小・範囲拡大

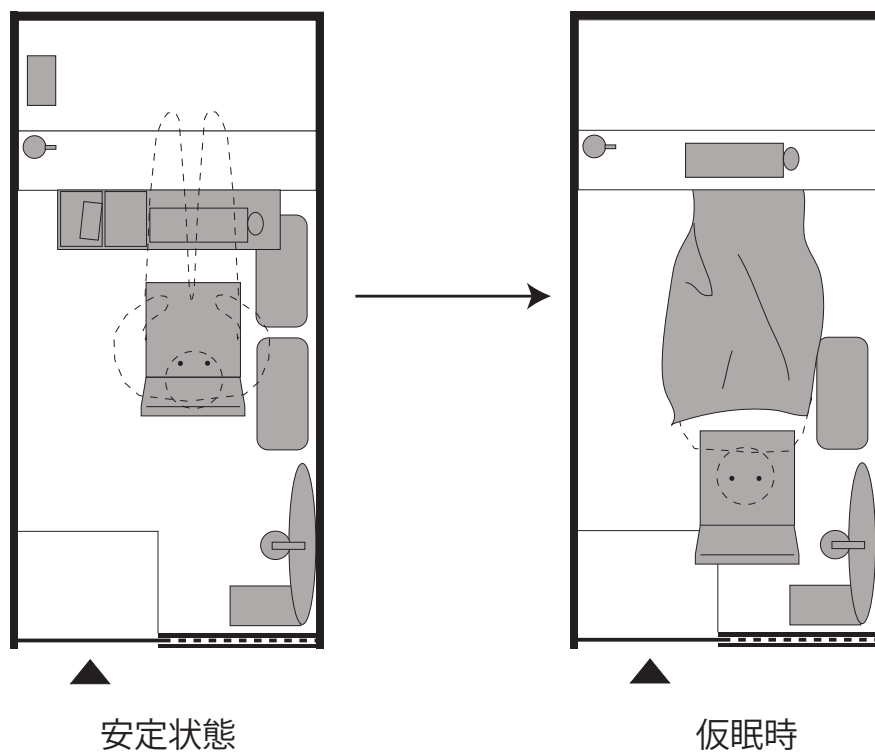


図 14. 事例 16：身体の制限小・範囲拡大

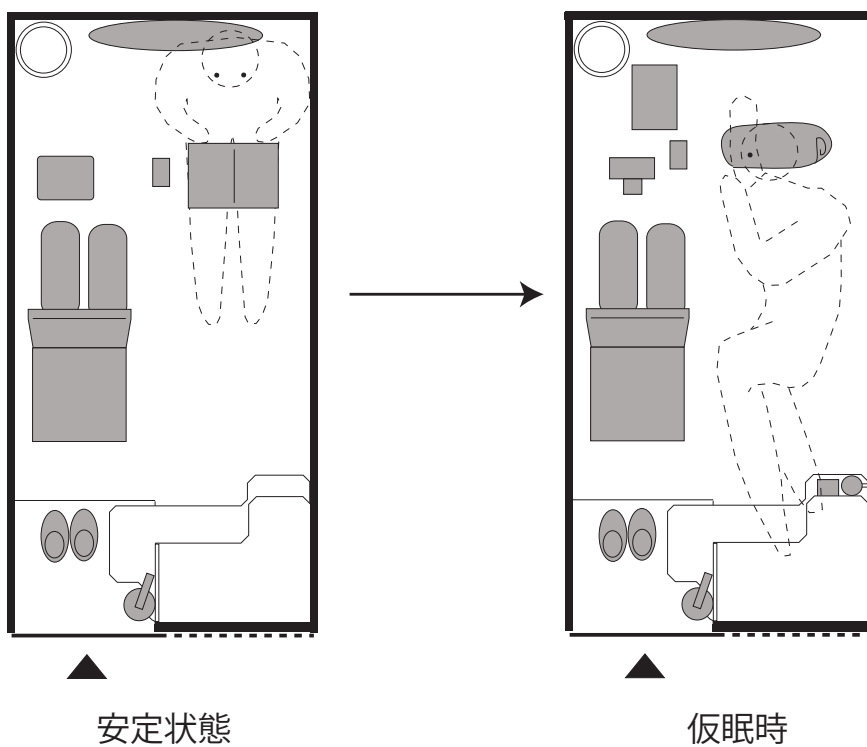


図 15. 事例 7：身体の制限小・範囲拡大

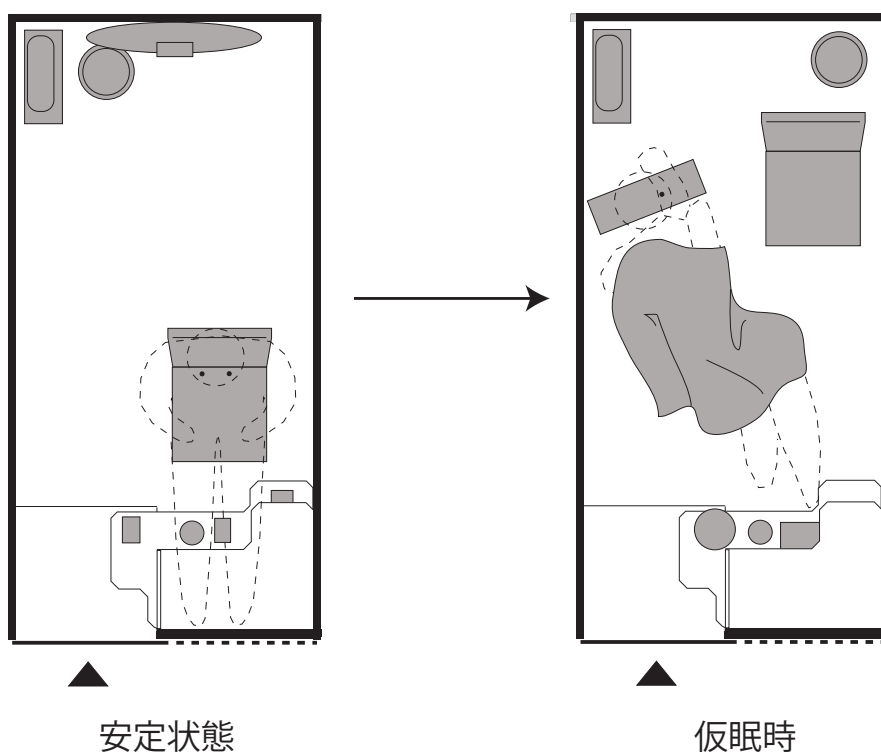


図 16. 事例 8：身体の制限大・範囲拡大

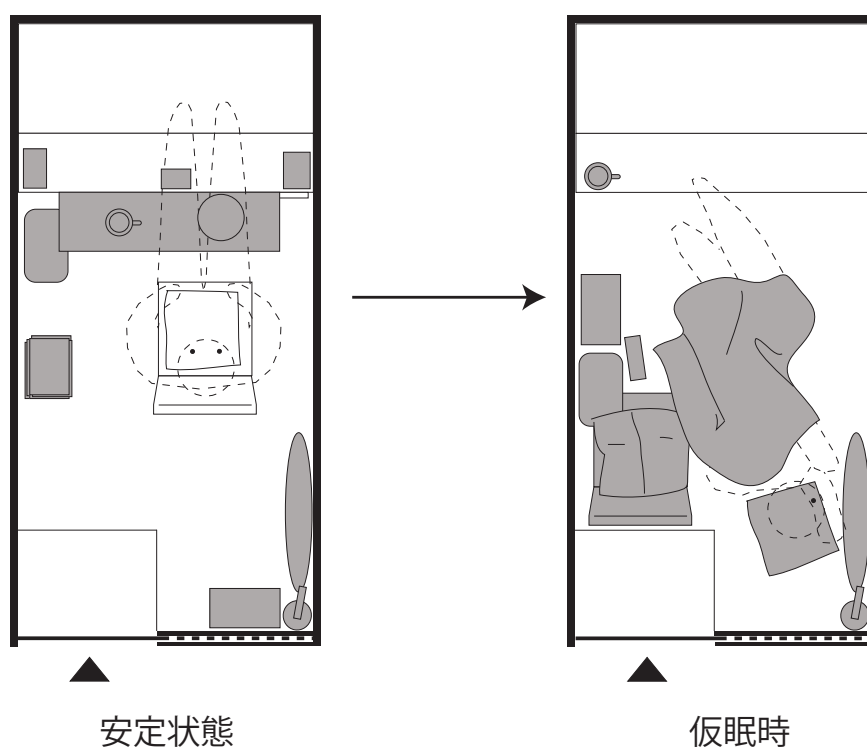


図 17. 事例 13：身体の制限小・範囲拡大

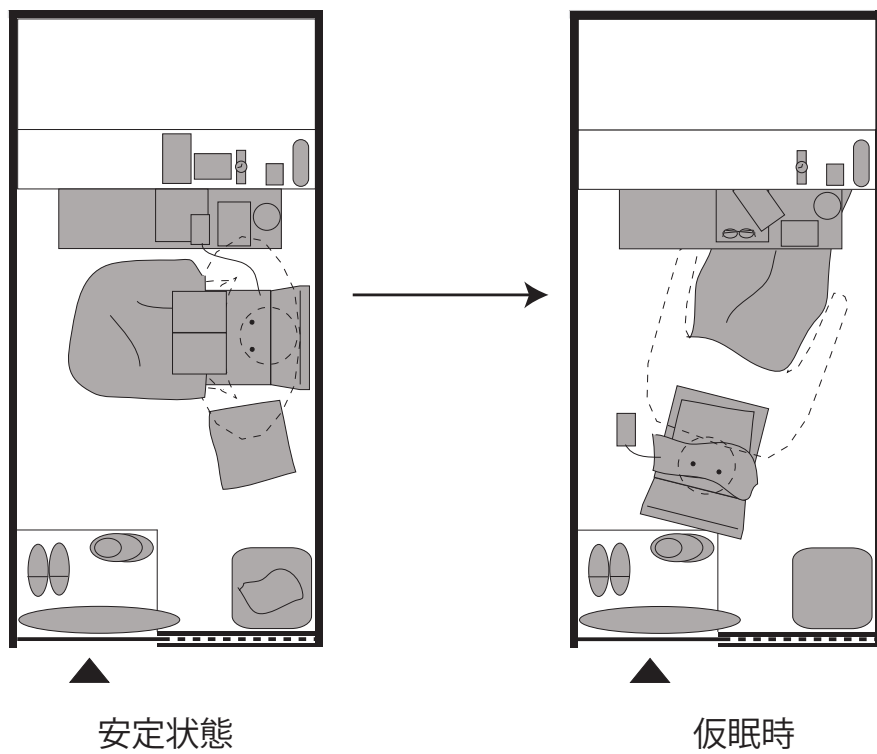


図 18. 事例 14：身体の制限小・範囲拡大

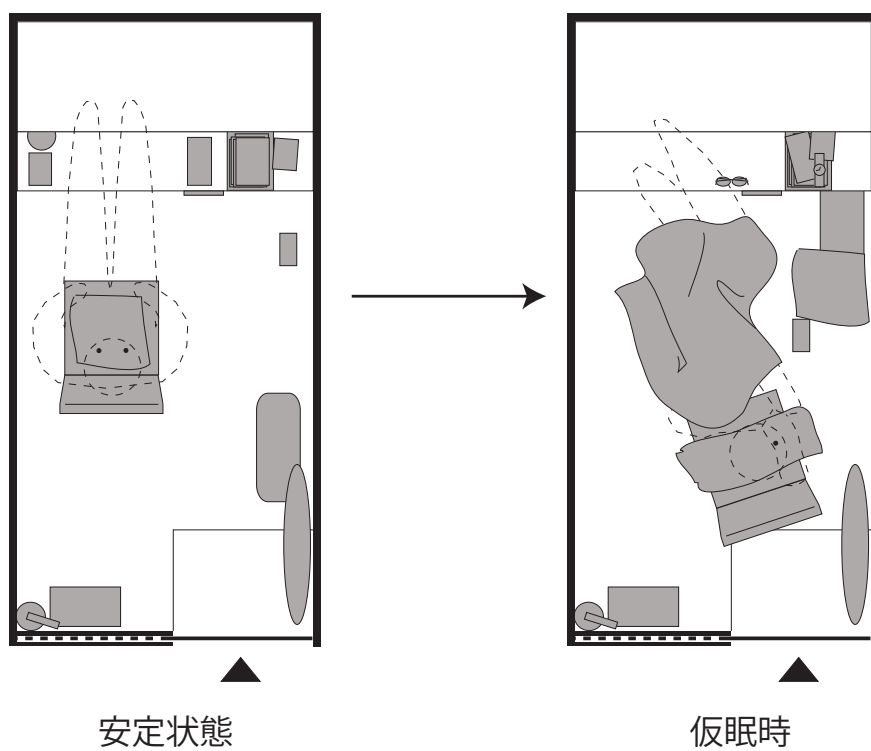


図 19. 事例 15：身体の制限小・範囲拡大

	リクライニング				フラット			
	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
A型	限定	限定	限定	限定	拡大	拡大	拡大	拡大
	← 身体的制限大 →				← 身体的制限小 →			
B型	事例9	事例10	事例11	事例12	事例13	事例14	事例15	事例16
	限定	拡大	限定	限定	拡大	拡大	拡大	拡大

図 20. 身体的制限と物品の配置範囲

3-3-2 心理的制限

心理的な制限が形成される個人的領域に及ぼす影響を捉えるために、「A 型」と「B 型」を比較し、考察を行う。なお、心理的な制限・他者の侵入に対する懸念の影響は、主にブース出入口付近の領域の構成や、貴重品の配置などに表れると考えられる。

1) 出入口付近の物品の配置について

「A 型」の場合、事例 3、6、7 では、出入口付近にゴミ箱 (32)、漫画 (9)、座椅子 (19) 等の配置が見られるが (図 21 ～図 23)、それ以外の事例 1、2、4、5、8 では、物品は配置されていない (図 24 ～図 28)。

一方「B 型」の場合、事例 9、11、16 では出入口付近への物品は見られないが (図 29 ～ 31)、それ以外の事例 10、12、13、14、15 では出入口付近にリクライニングチェア (17) や、座椅子 (19)、袖机 (51) などが配置されている (図 32 ～図 36)。

これらのことから、出入口が利用者の後方に位置する「B 型」のブースでは、出入口が利用者の前方に位置する「A 型」のブースに比べて、就寝時に出入口付近に、万一の他者の侵入を懸念した物品の配置が行われる傾向が強い、(図 37) と考えられる。

また出入口付近に配置される物品の種類は、構築されている個人的領域の範囲に関係していると考えられる。例えば、入口付近に何も配置されない場合、個人的領域はブースの範囲よりも小さいが、個人的領域が拡大すると漫画やゴミ箱などが出入口周辺に領域を示すために配置されるようになり、椅子や袖机といった物理的なバリケードとなりうる物品が配置される段階では、利用者はほぼブース全体を私的領域と捉えていると考えられる。

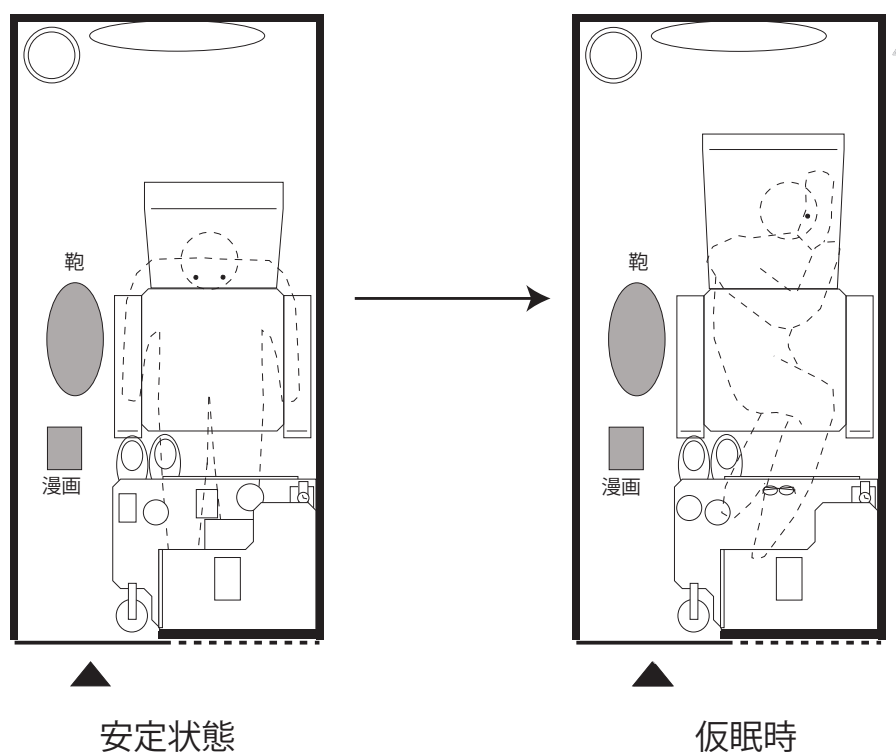


図 21. 事例 3：心理的制限小・配置あり

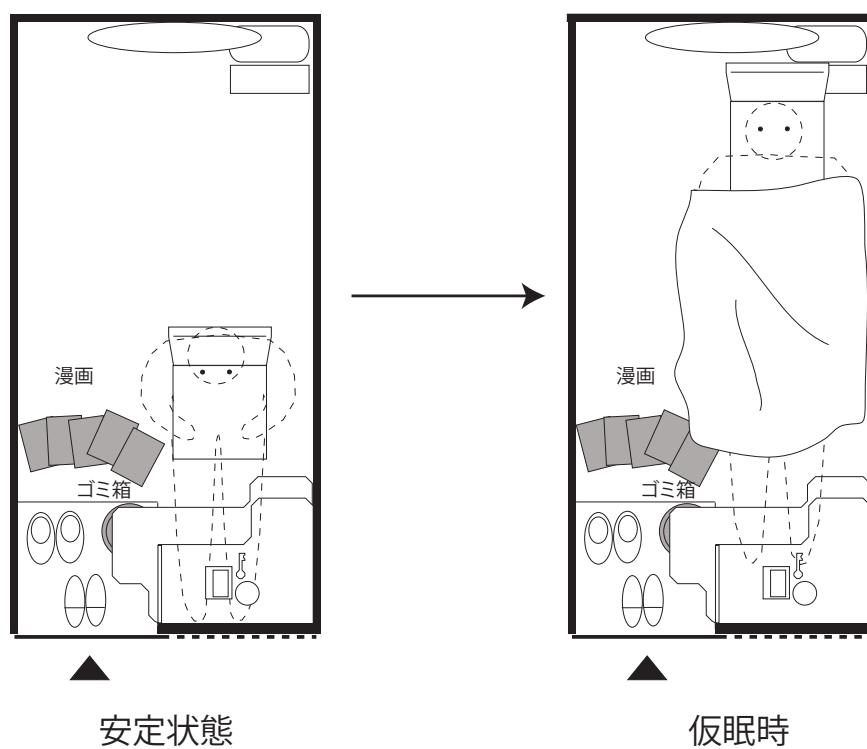


図 22. 事例 6：心理的制限小・配置あり

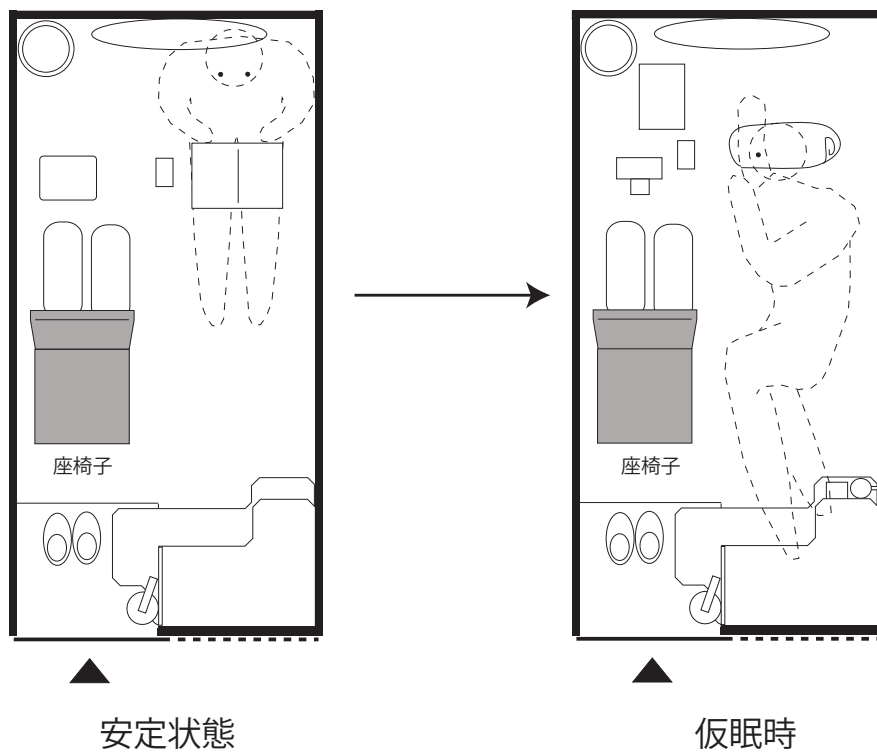


図 23. 事例 7：心理的制限小・配置あり

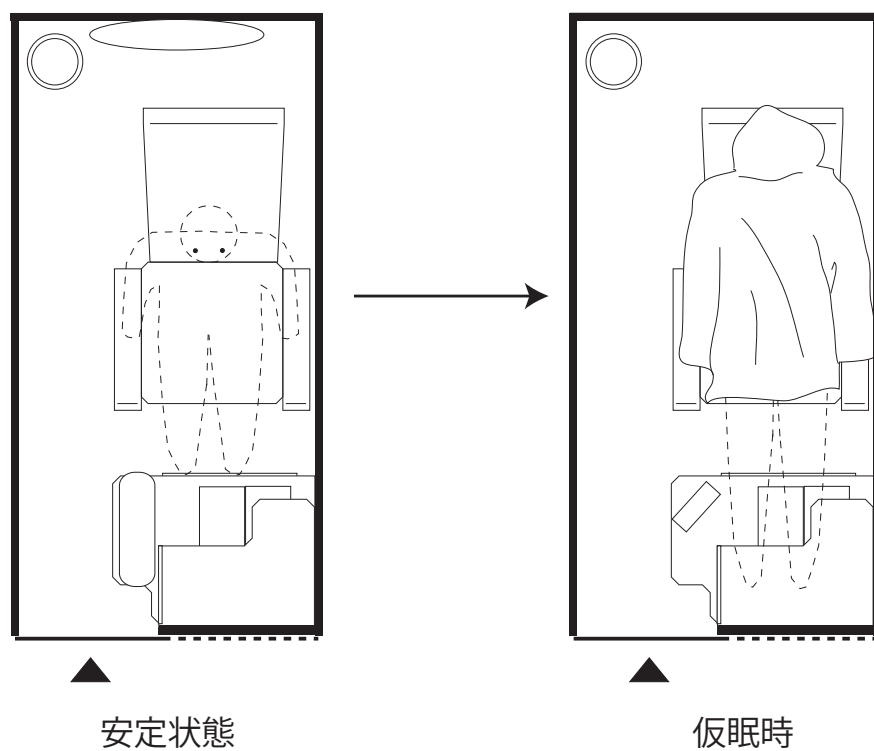


図 24. 事例 1：心理的制限小・配置なし

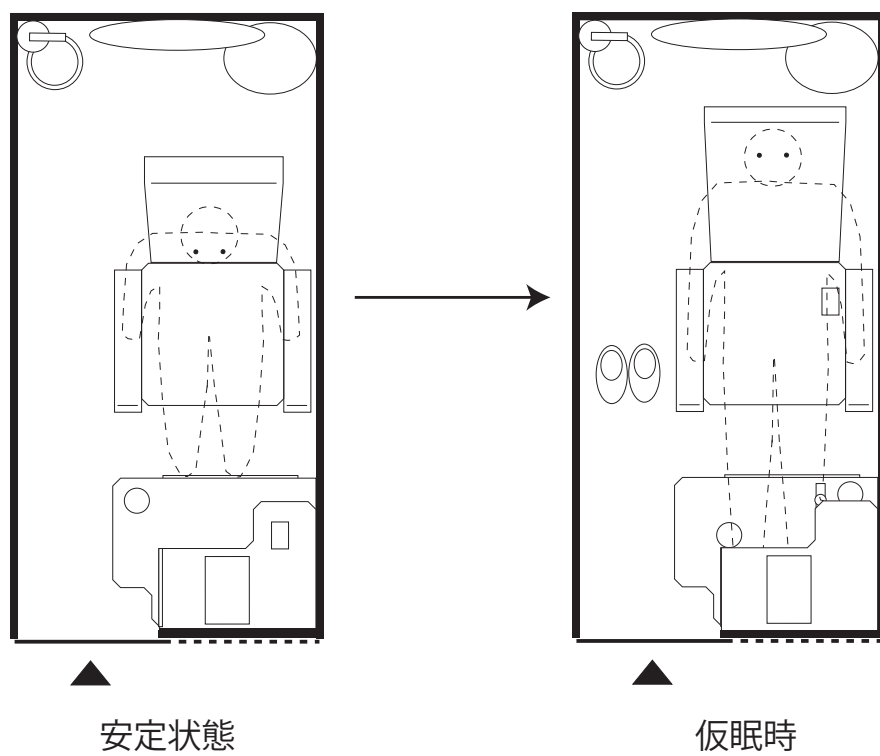


図 25. 事例 2：心理的制限小・配置なし

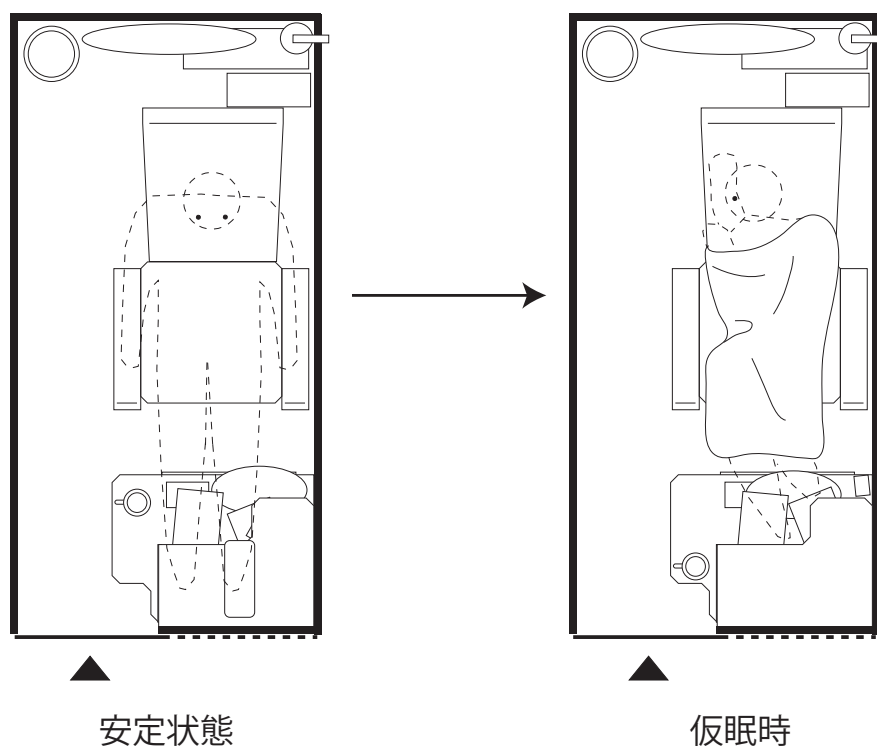


図 26. 事例 4：心理的制限小・配置なし

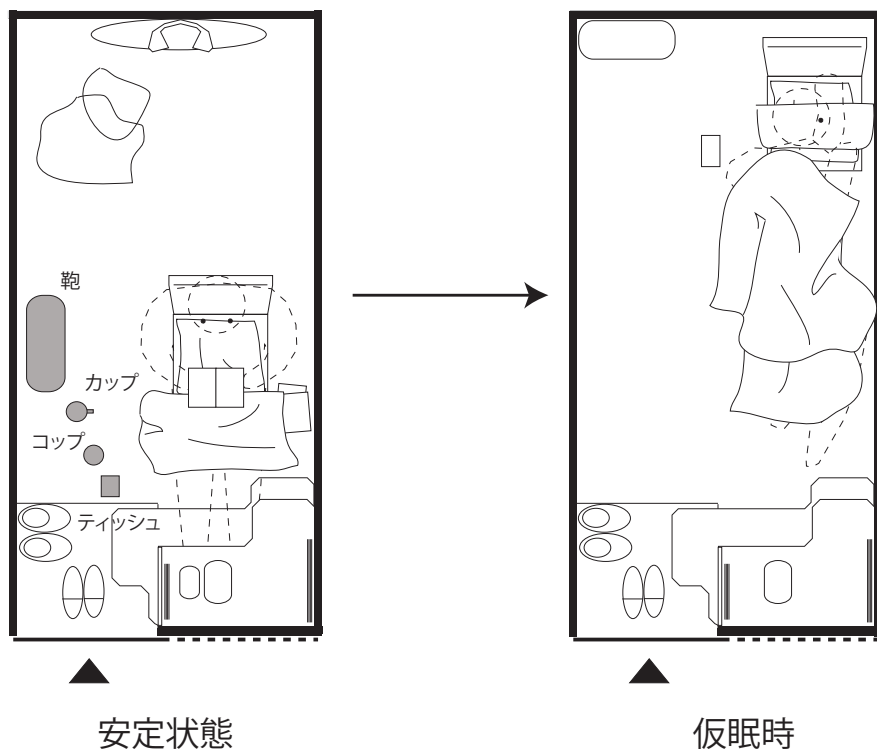


図 27. 事例 5：心理的制限小・配置なし

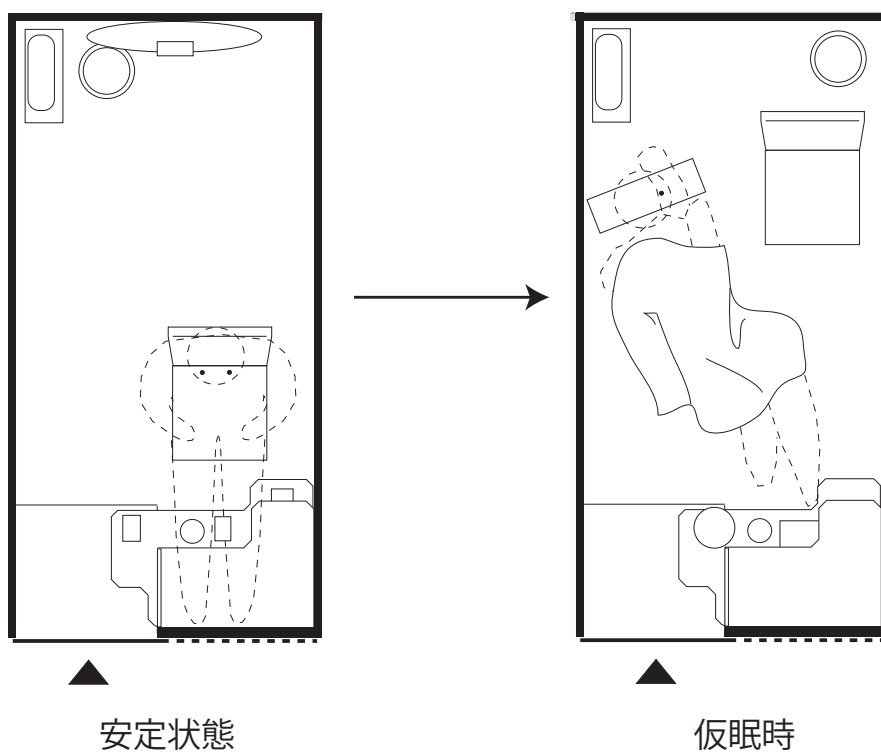


図 28. 事例 8：心理的制限小・配置なし

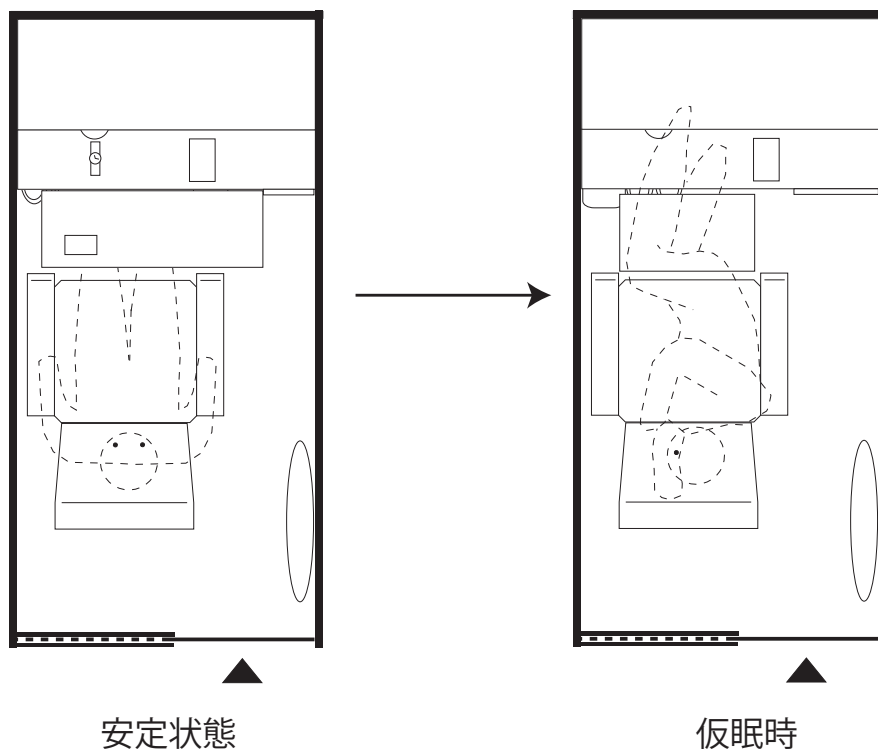


図 29. 事例 9：心理的制限大・配置なし

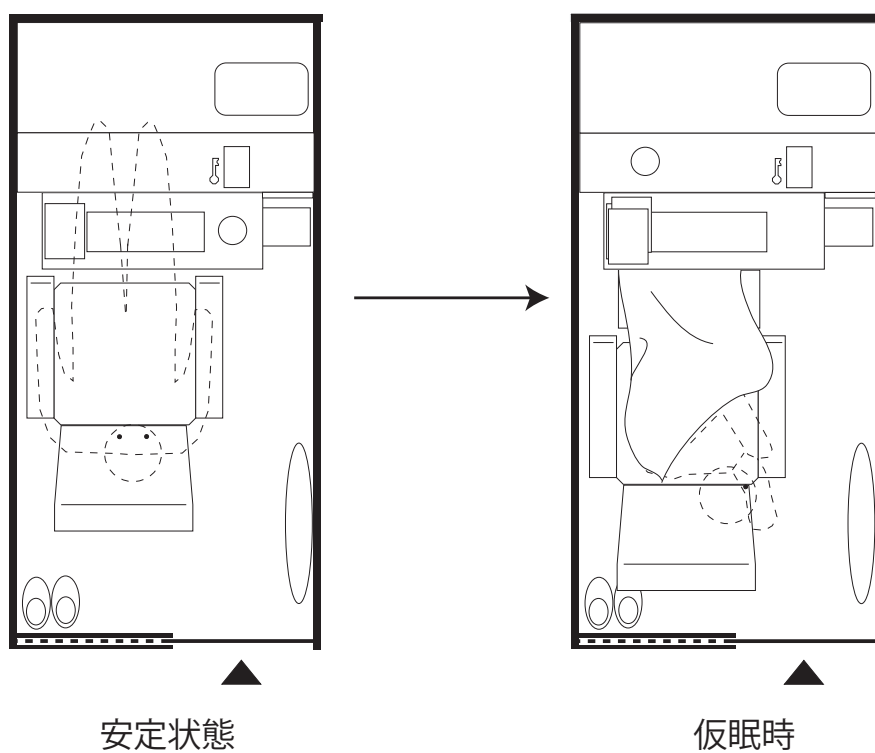


図 30. 事例 11：心理的制限大・配置なし

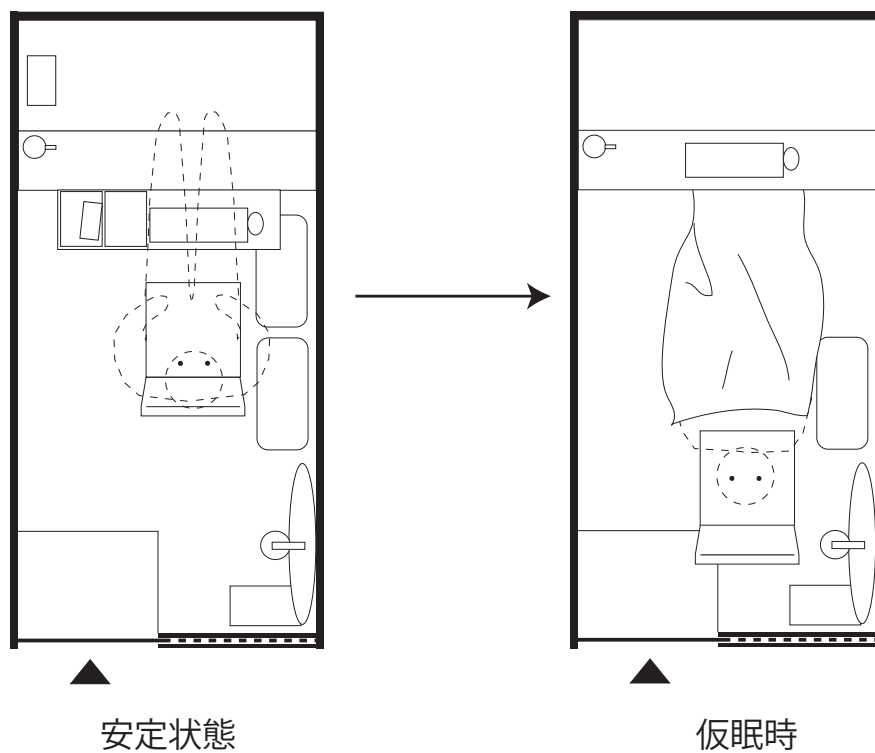


図 31. 事例 16：心理的制限大・配置なし

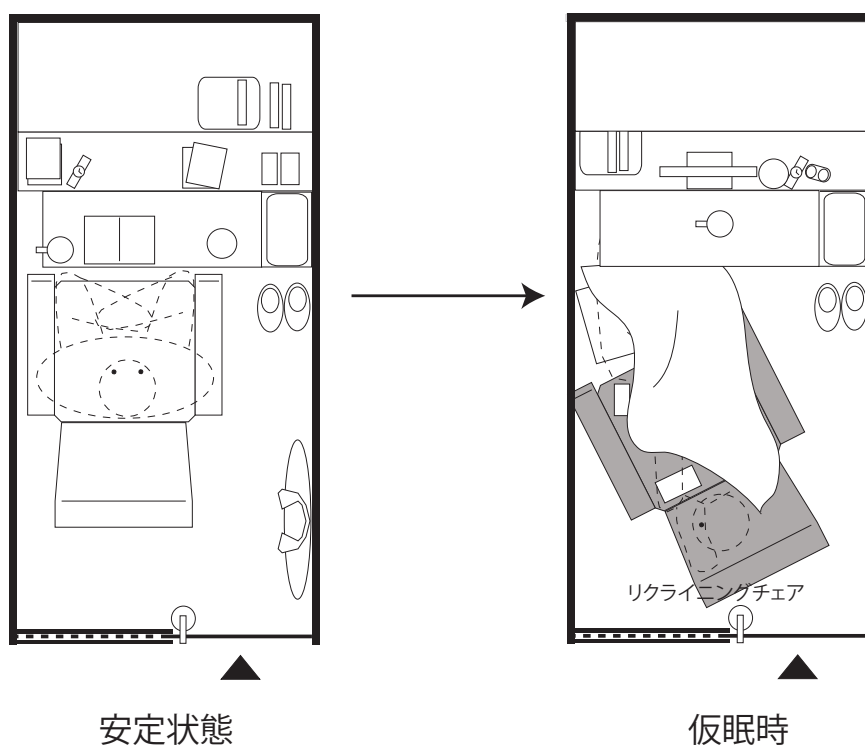


図 32. 事例 10：心理的制限大・配置あり

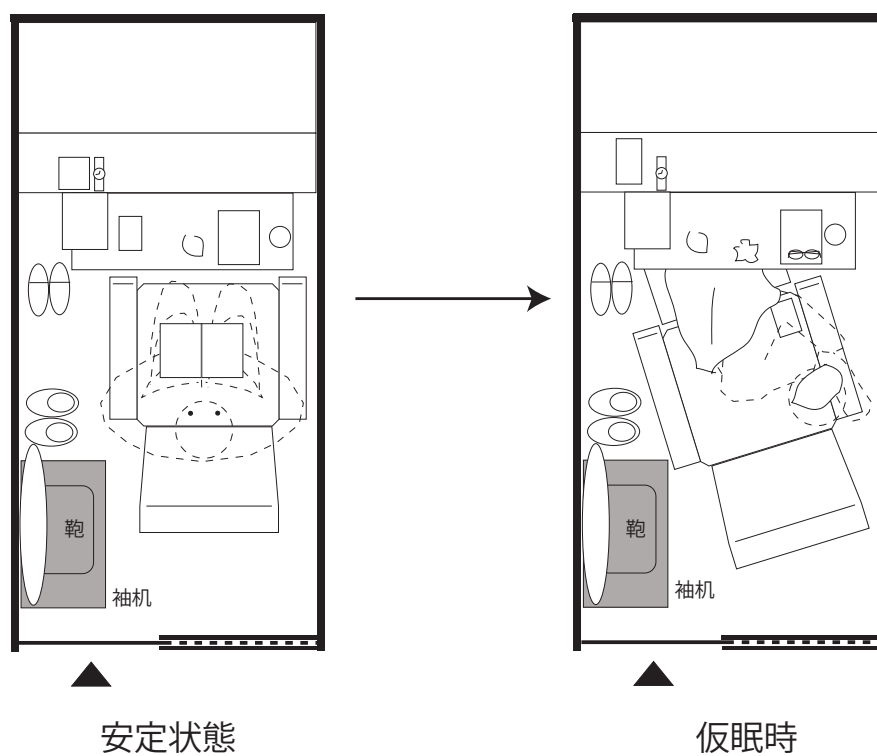


図 33. 事例 12：心理的制限大・配置あり

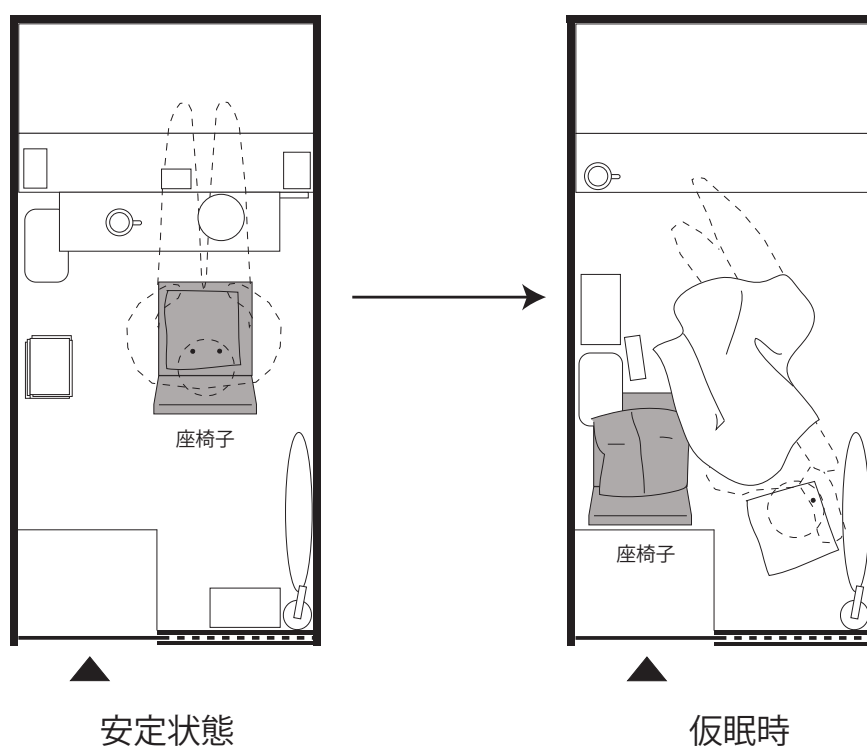


図 34 事例 13：心理的制限大・配置あり

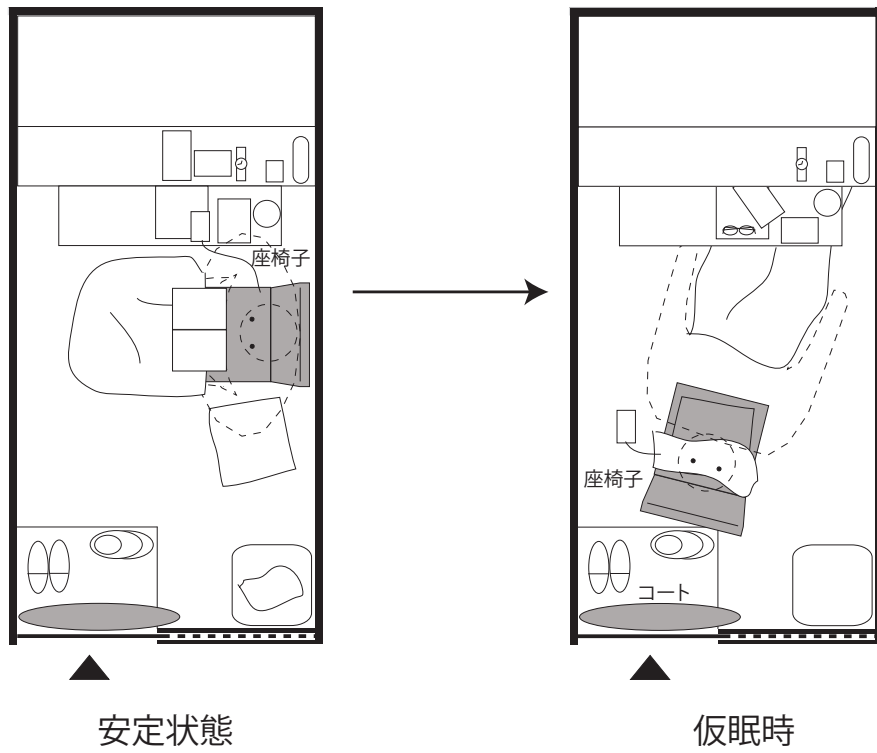


図 35. 事例 14：心理的制限大・配置あり

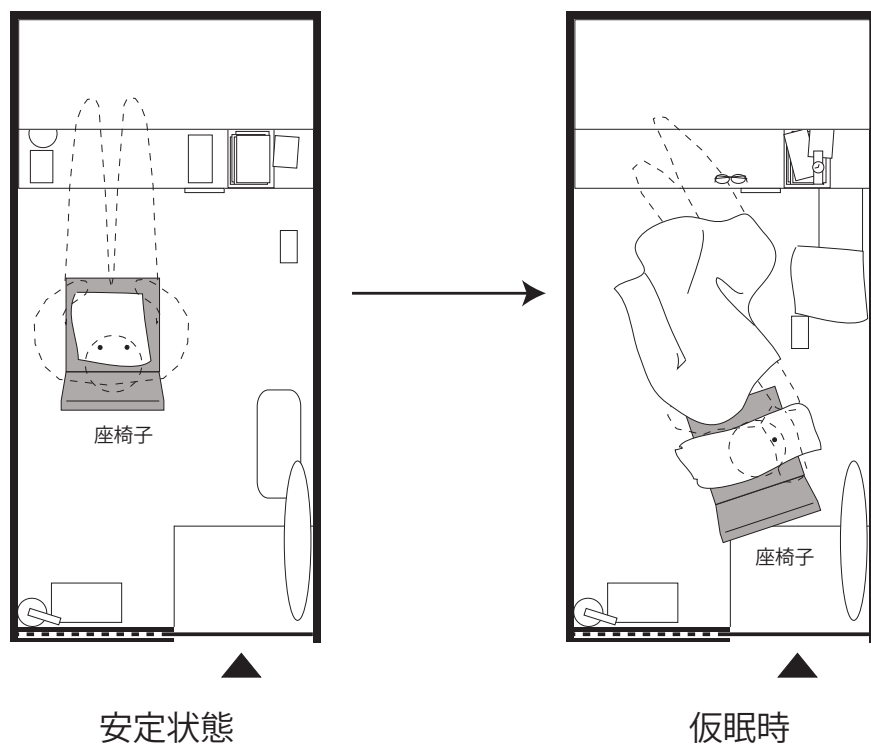


図 36. 事例 15：心理的制限大・配置あり

リクライニング				フラット				
A型	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
	無し	無し	有り	無し	無し	有り	有り	無し
	心理的制限小							
B型	事例9	事例10	事例11	事例12	事例13	事例14	事例15	事例16
	無し	有り	無し	有り	有り	有り	有り	無し
	心理的制限大							

図 37. 心理的制限と出入口付近への物品の配置

2) 貴重品の位置について

「A 型」の場合、事例 1 で鞆 (1) がフットレストの上に、事例 2 で携帯電話 (5) がリクライニングチェア (17) の座面に、事例 5 で鞆 (1) と携帯電話 (5) がブース奥に移動している移動しているが (図 38 ～ 40)、それ以外の事例 3、4、6、7、8 では、大きく動いていない (図 41 ～ 45)。

「B 型」の場合、事例 9 で鞆 (1) をブースの奥に、事例 10、12 では、携帯電話 (5) を入口から見て死角となる、リクライニングチェア (17) の座面に移動させている。また、事例 15、16 でも鞆 (1) や、携帯電話 (5) を、それぞれ入口から見て死角となる位置に移動させている (図 46 ～ 図 50)。それ以外の事例 11、13、14 では、貴重品の大きな移動は見られない (図 51 ～ 図 53)。

これらの事から、「B 型」のブースでは就寝時に、貴重品が出入口から遠い位置、または死角となる位置に配置される傾向が「A 型」のブースに比べて強い。これは自分にとって重要な物品を、他者の干渉が及びにくい場所に配置することで、仮眠時の心理的な負荷を軽減させていると考えられる (図 54)。

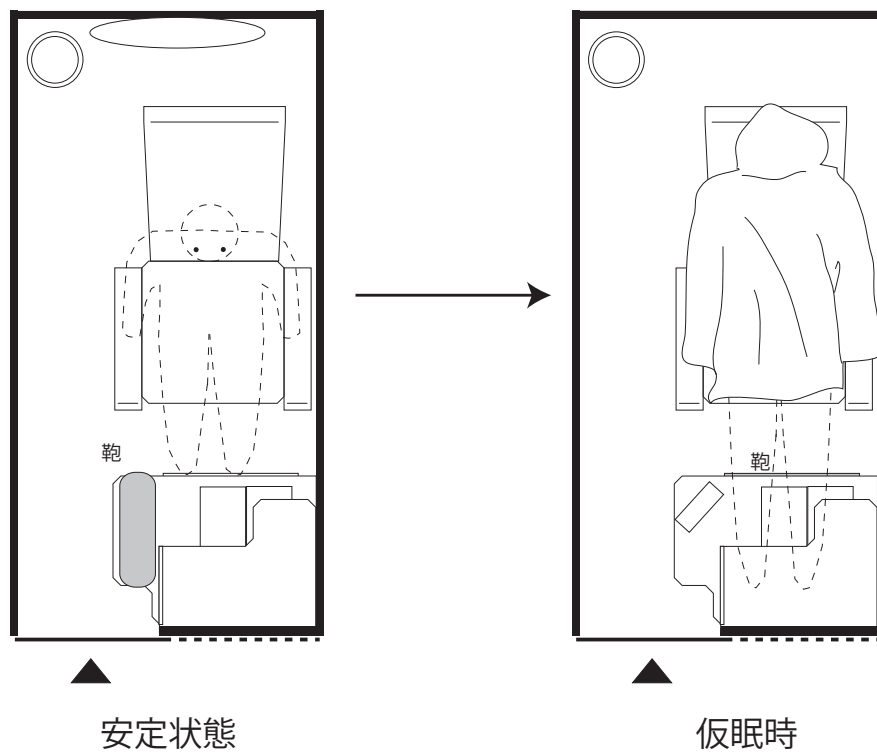


図 38. 事例 1：心理的制限小・移動あり

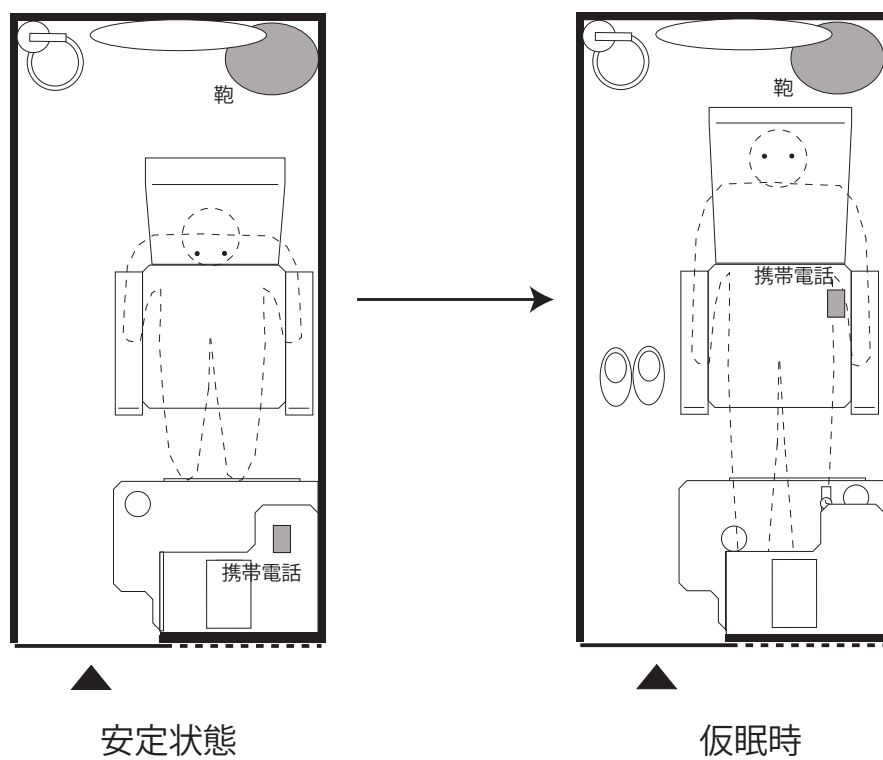


図 39. 事例 2：心理的制限小・移動あり

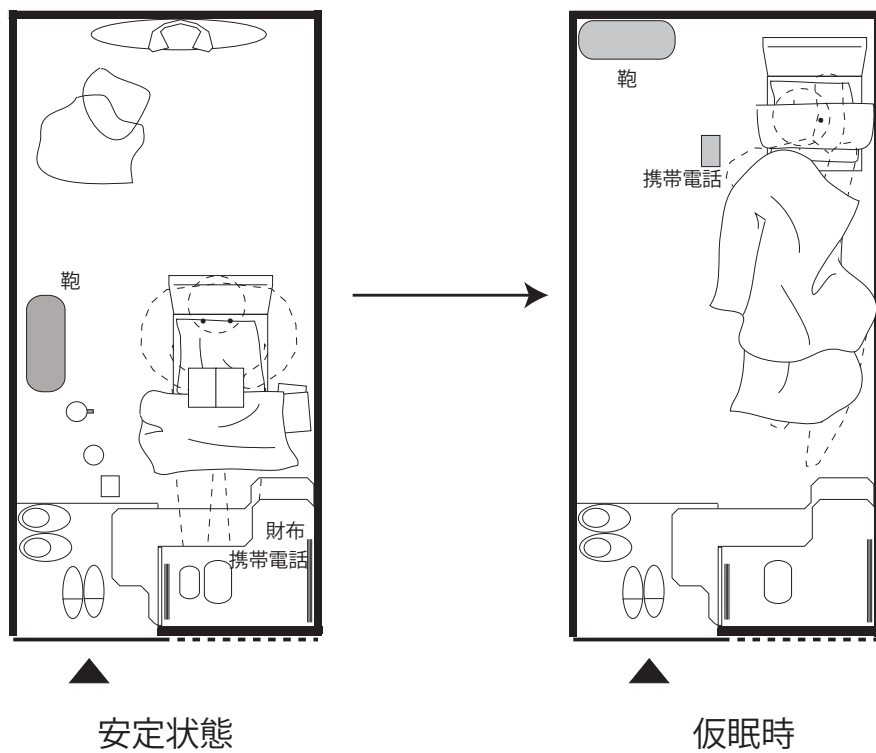


図 40. 事例 5：心理的制限小・移動あり

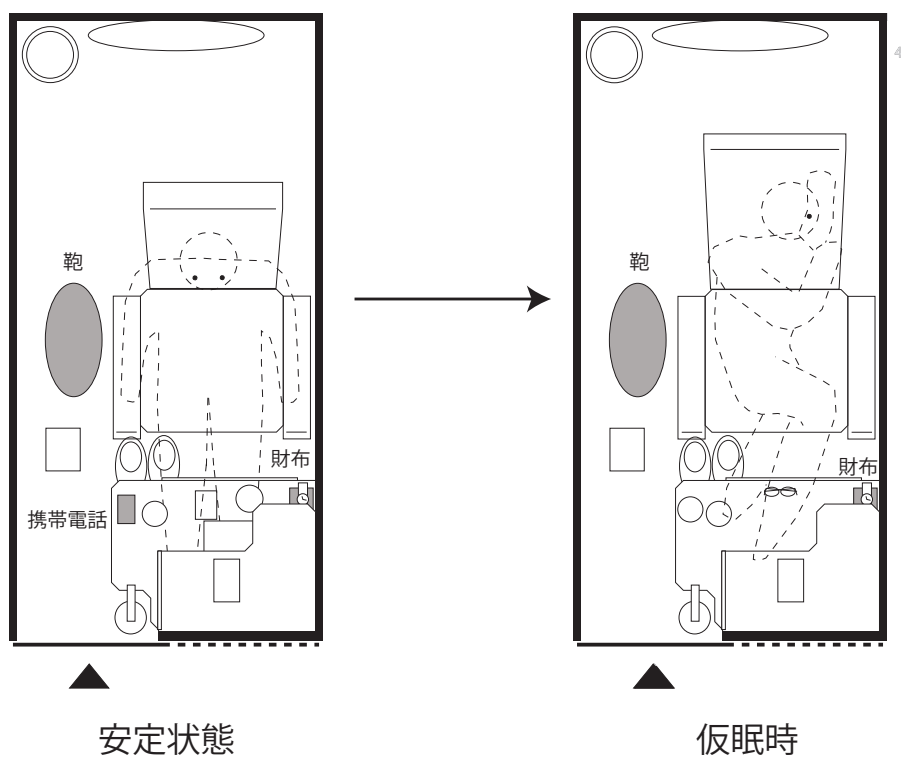


図 41. 事例 3：心理的制限小・移動なし

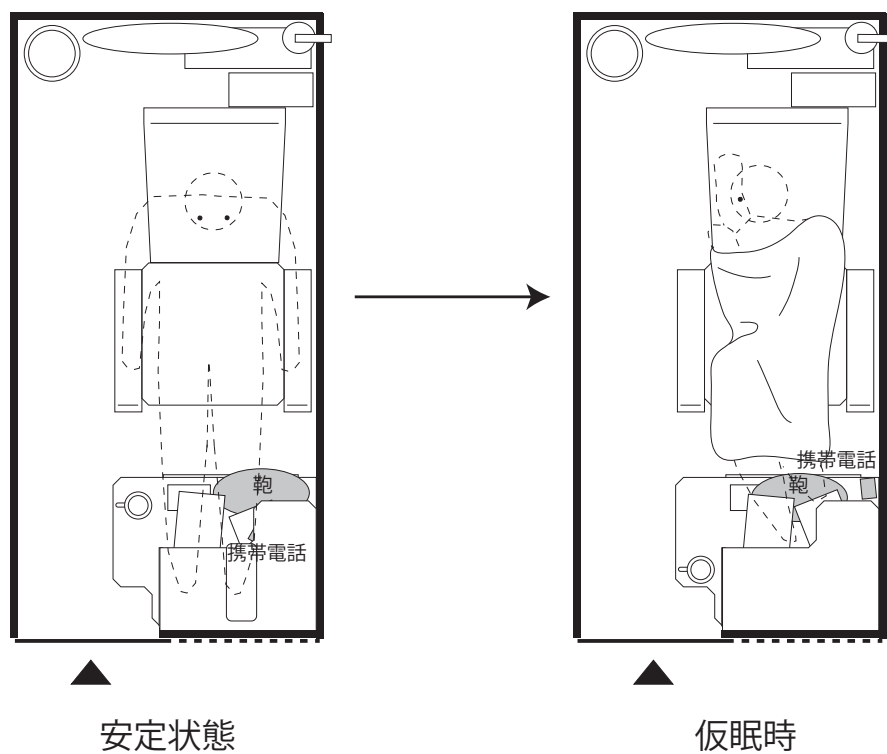


図 42. 事例 4：心理的制限小・移動なし

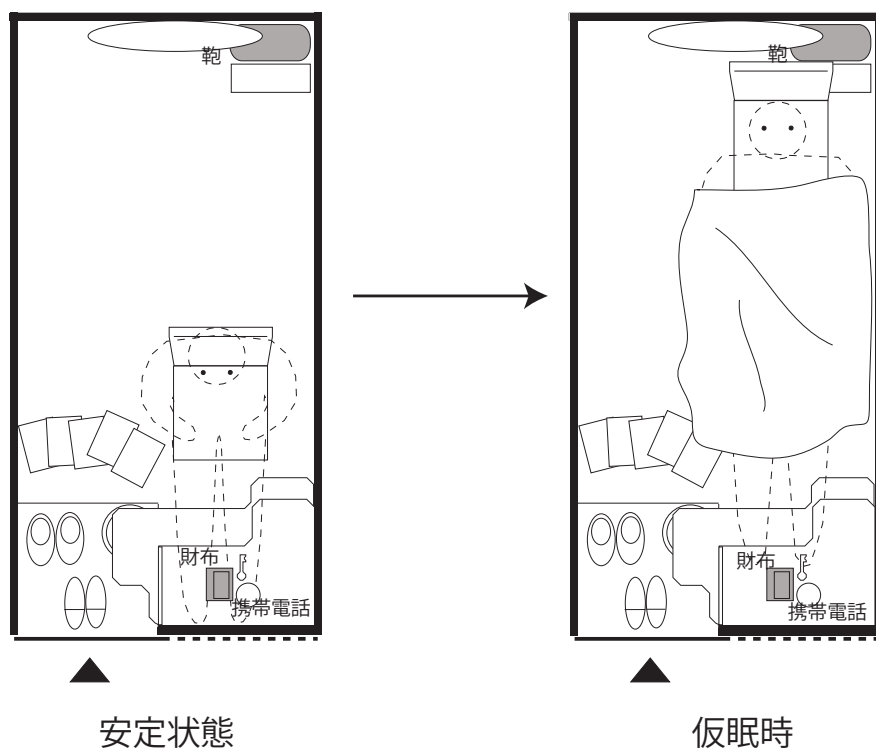


図 43. 事例 6：心理的制限小・移動なし

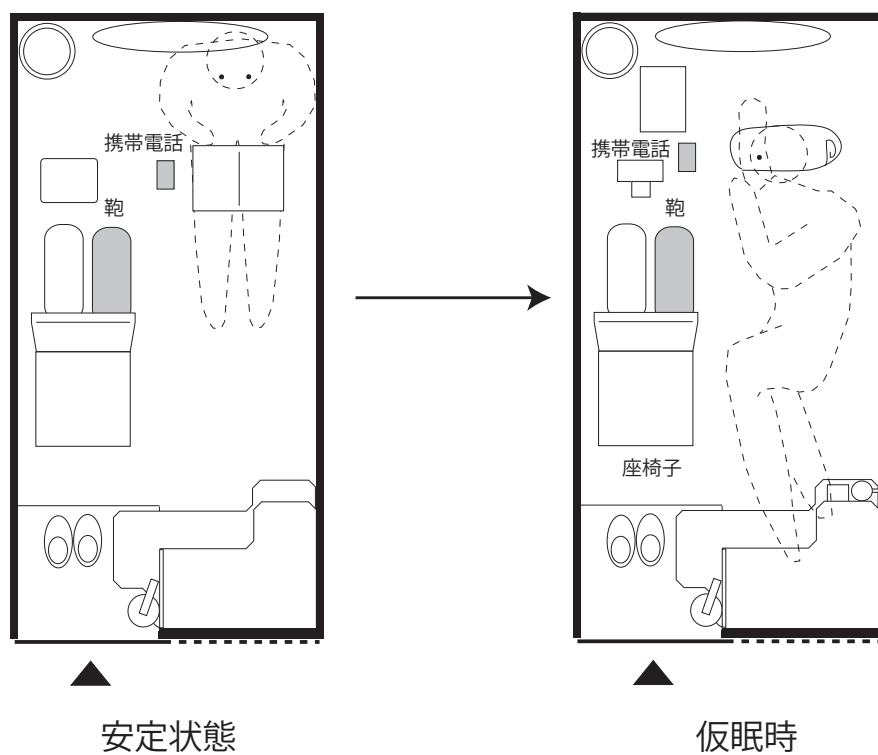


図 44. 事例 7：心理的制限小・移動なし

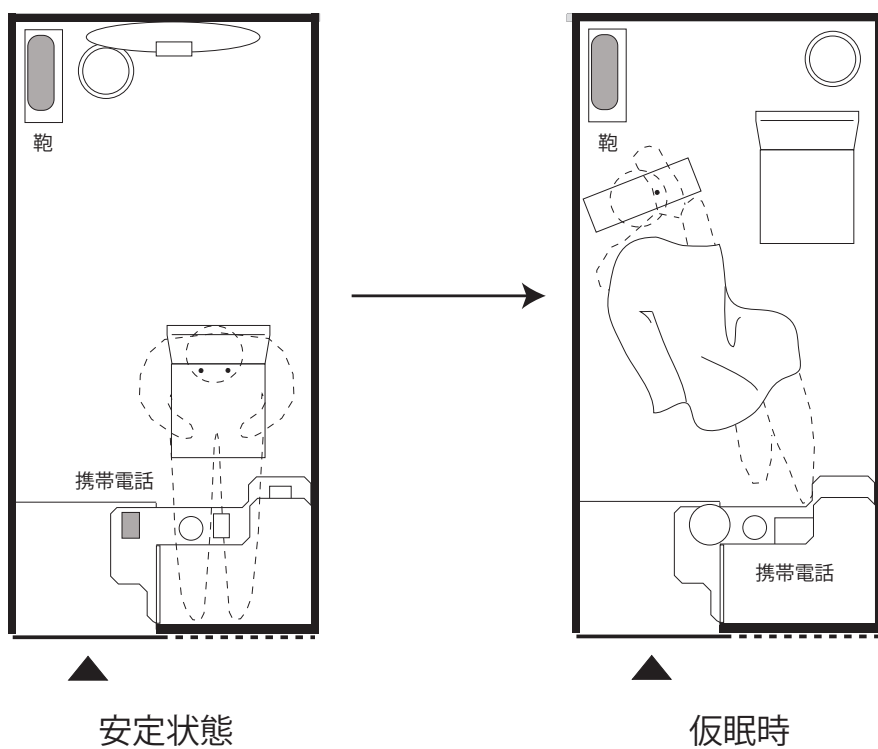


図 45. 事例 8：心理的制限小・移動なし

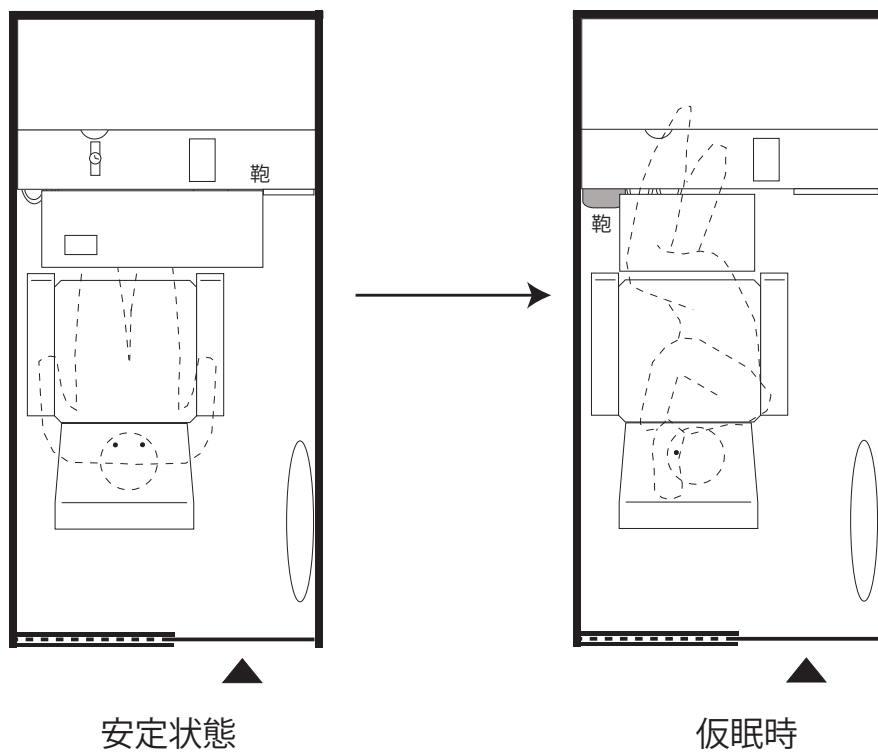


図 46. 事例 9：心理的制限大・移動あり

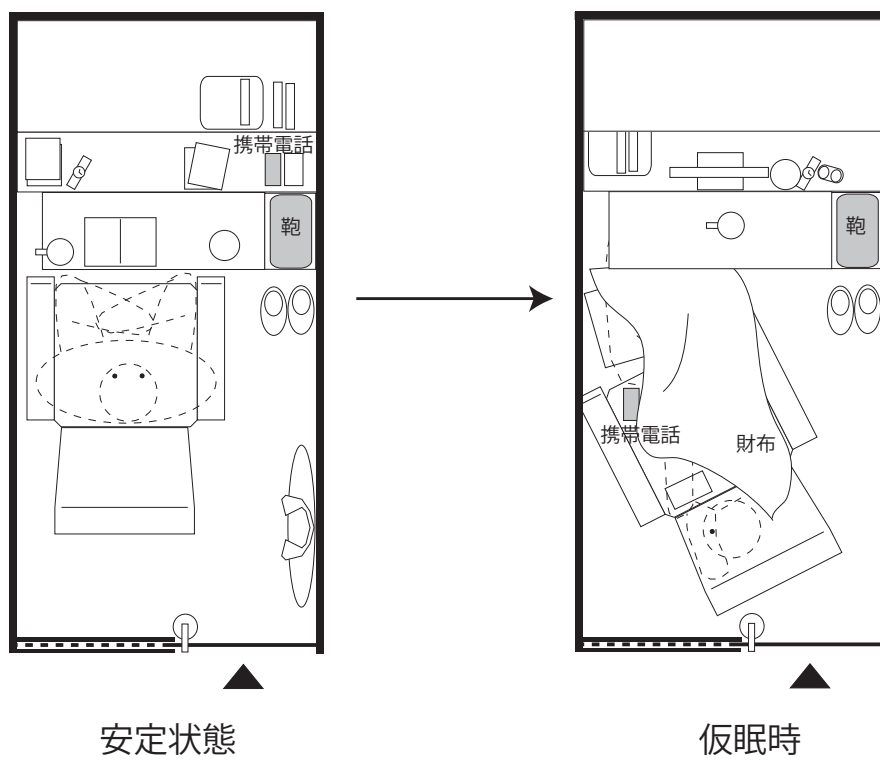


図 47. 事例 10：心理的制限大・移動あり

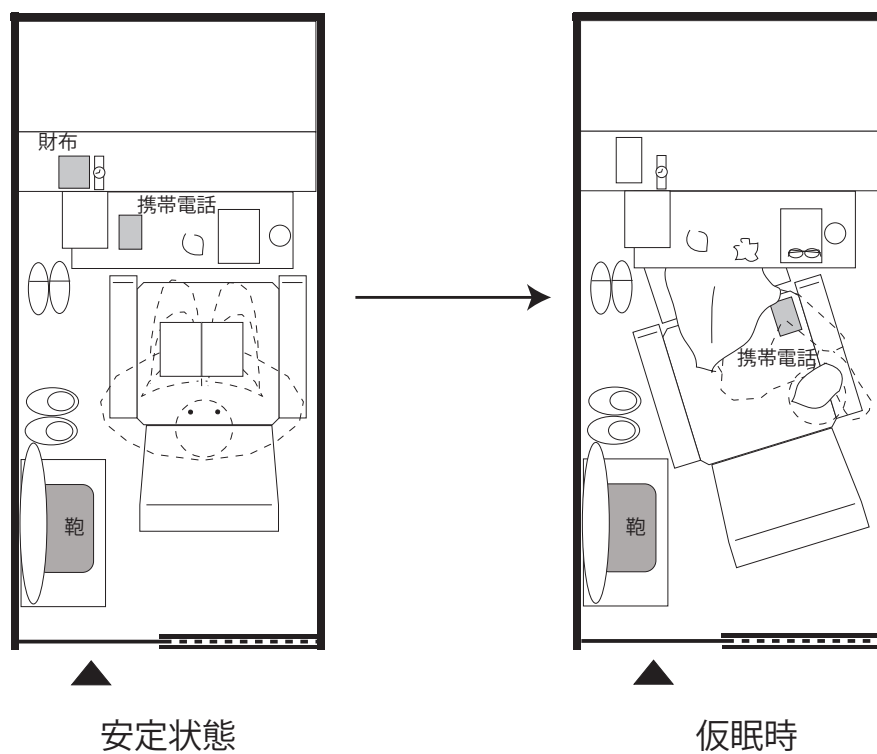


図 48. 事例 12：心理的制限大・移動あり

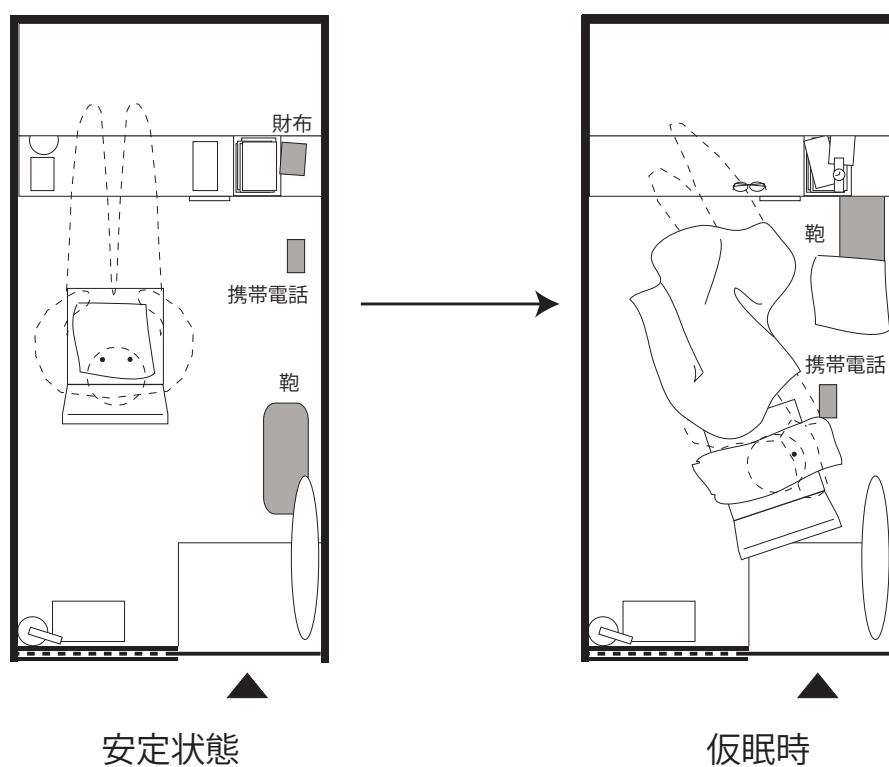


図 49. 事例 15：心理的制限大・移動あり

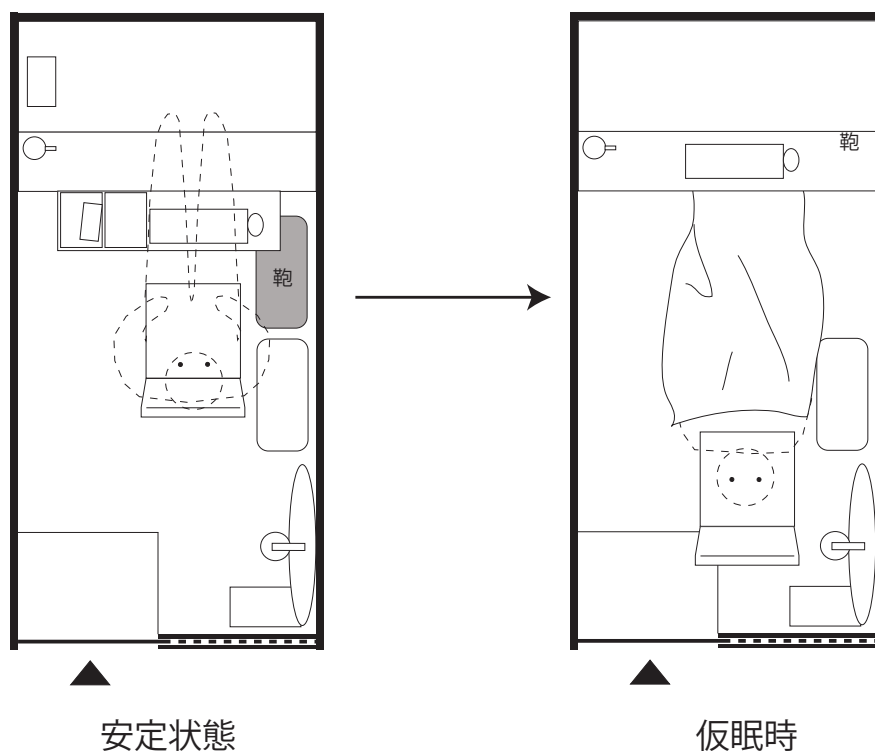


図 50. 事例 16：心理的制限大・移動あり

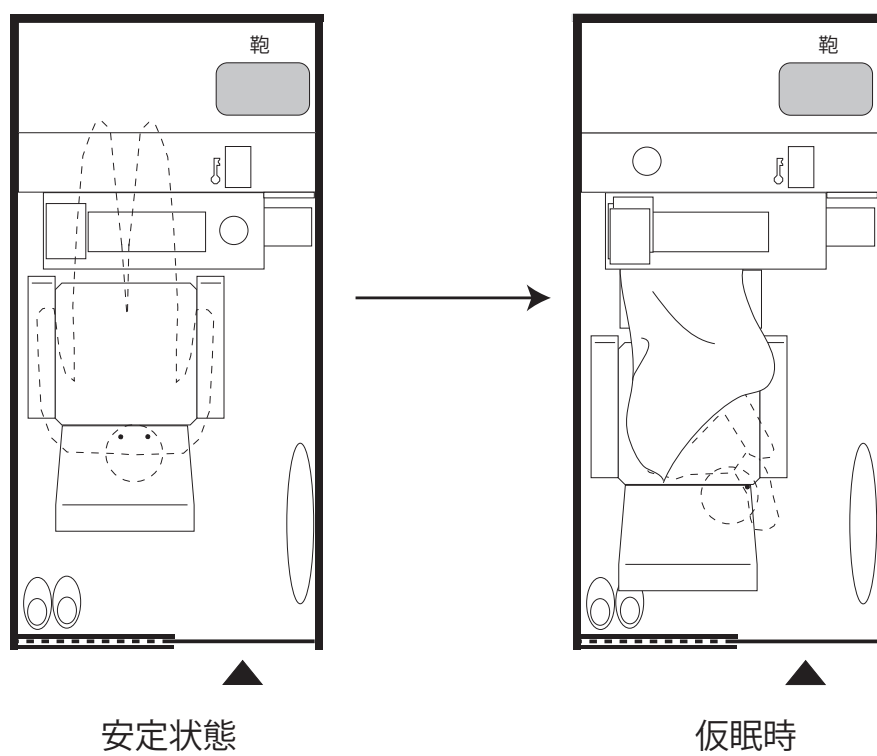


図 51. 事例 11：心理的制限大・移動なし

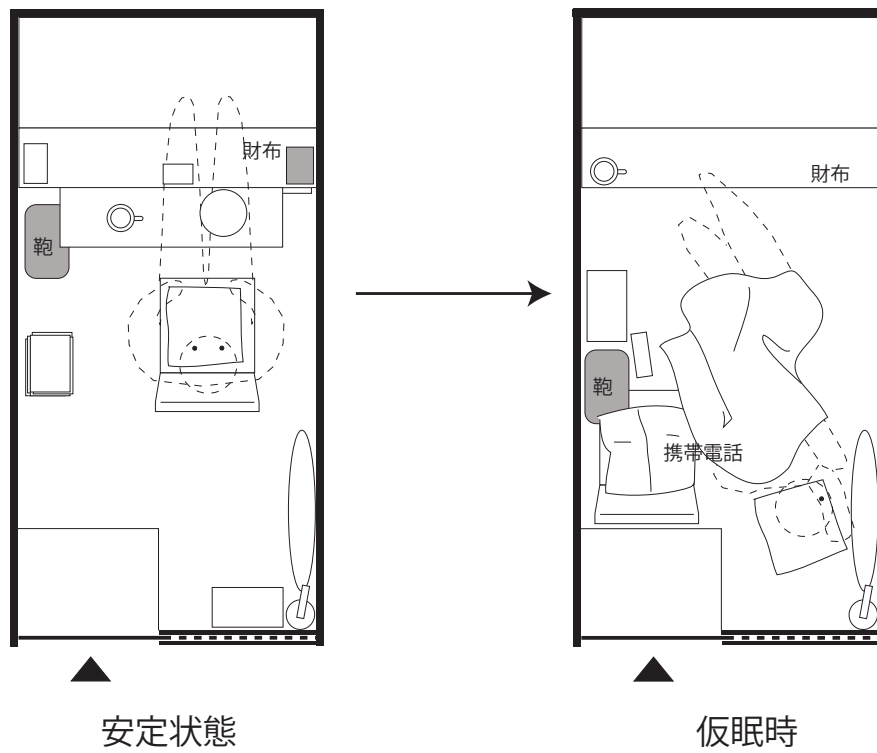


図 52. 事例 13：心理的制限大・移動なし

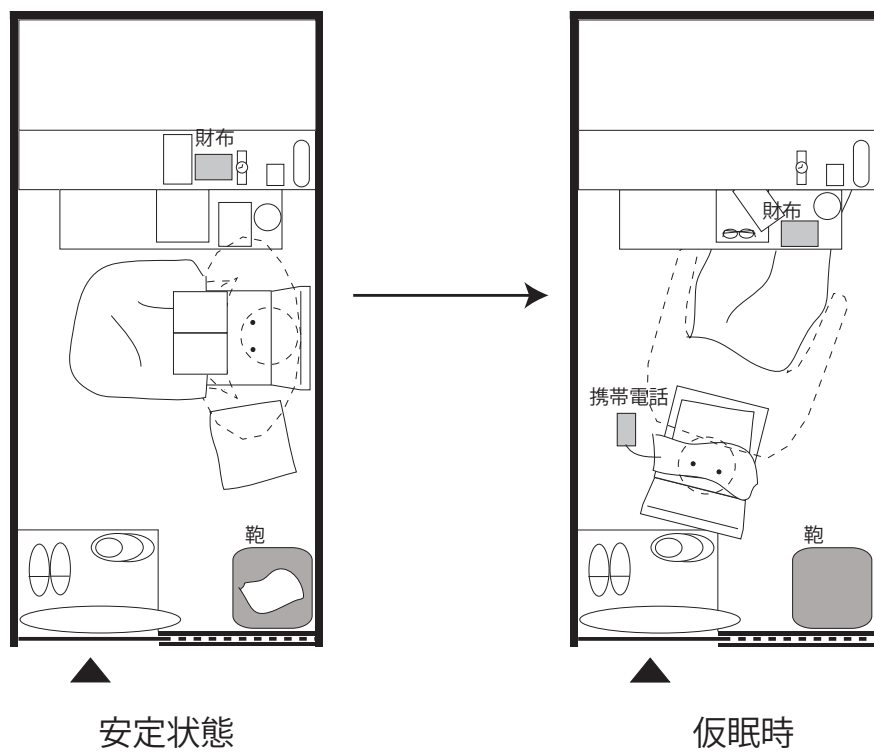


図 53. 事例 14：心理的制限大・移動なし

リクライニング				フラット				
A型	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8
	有り	有り	無し	無し	有り	無し	無し	無し
	心理的制限小							
B型	事例9	事例10	事例11	事例12	事例13	事例14	事例15	事例16
	有り	有り	無し	有り	無し	無し	有り	有り
	心理的制限大							

図 54. 心理的制限と仮眠時における貴重品の移動

第4章 まとめ

まとめ

本研究では、札幌市内のインターネットカフェを研究対象とし、まず実地調査によってその空間的な特徴を把握した。これにより、札幌市内のインターネットカフェのブースが大きく7種類に分類される事、「リクライニング」型と「フラット」型の2種類のブースをほぼ全ての店舗が採用している事、「リクライニング」「フラット」には、出入口の位置が異なる「A型」「B型」が存在する事などが明らかになった。ここで得られた「A型リクライニング」、「B型リクライニング」、「A型フラット」、「B型フラット」の4種類を、札幌市のインターネットカフェの典型的なブースであると定義した。

次に実地調査で得られた4種類のブースを対象とし、実験的な利用による実態調査を行い、その実際の利用状況を把握した。そしてこの実態調査の結果を基に、ブース内に形成されている物理的環境、パーソナライゼーションを分析する事で、ブースの空間的特徴から見出した「身体的制限」「心理的制限」という要素と、個人的領域の構築の仕方の関係について、以下のような傾向があるという事を明らかにした。

- 1) 身体的制限が大きい場合、個人的領域は椅子の周囲の限定的なものとなる傾向があるが、逆に身体的制限が小さい場合は、個人的領域の範囲は広くなる傾向がある。
- 2) 心理的制限が大きい場合は、心理的制限が小さい場合に比べて、仮眠時にブースの出入口付近に、万が一の場合の他人の侵入を妨げるような物品が配置される傾向が強い。
- 3) 心理的制限が大きい場合は、心理的制限が小さい場合に比べて、仮眠時に貴重品を出入口から遠い位置、または死角となる位置に配置する傾向が強い。

これらの傾向を、インターネットカフェにおけるパーソナライゼーションに関する基礎的な知見とする。

本研究によって得られた、多数の人間が同時に利用するパブリックな空間の中に、最低限のしつらえだけで、就寝のように高いプライバシー性の要求される行為を許容する個人的領域を構築する方法に関する知見は、例えば病院の多床室などの計画に応用する事が可能なのではないだろうか。病院の多床室は複数の人間が同時に利用するパブリックな空間であり、各ベッドの間がカーテンやパーティションで仕切られている点や、音・匂い・振動などによって、仕切られてはいても他者の存在を感じる点などにインターネットカフェのブースに通じる物を感じる。さらに、多床室の利用者はインターネットカフェの利用者と異なり、自らの意志で利用を中止することが出来ない。このような特徴を持つ施設において、利用者が個人的領域を構築しやすい空間の作り方をしておけば、利用者の精神衛生に貢献することができ、回復速度にも影響するのではないかと考えられる。

本研究の調査を通じて、インターネットカフェが多くの人に受け入れられている現状を

改めて確認した。平日・休日・昼間・夜間を問わず利用者は絶えない。利用者の年齢や人数も多様で、休日の夜をインターネットカフェで過ごす、小学生くらいの子どもを連れた母親の姿も何度か見かけたことがある。

これほどまでにインターネットカフェがで過ごすという行為が一般に定着しているのは、近年のライフスタイルの多様化に伴い、従来のように住居内での生活を前提としたライフスタイルでは担保しきれない要求が発生し、これを満足させるために、インターネットカフェを利用することで補完するようになったと考えることはできないだろうか。

かく言う自分も本研究の調査で札幌市内のインターネットカフェを巡った際、日中は大学の研究室で作業し、夜間は現地調査に赴き、そのまま調査対象の店舗で一泊し、牛丼チェーン店で朝食を済ませ、一旦家に戻って着替えた後、また研究室に戻る、という生活を送った時期があった。決して快適な生活とは言えないが、場合によっては移動距離・時間の大幅な短縮が可能となり、調査の効率を上げるためには合理的であると感じた。

そうだとすれば次世代のライフスタイルは、これまでのような定住型のものから、必要な機能を都市に点在させ、それらを複合的に利用することで生活を充足させる、否定住型のものへと変化していく可能性が考えられる。

最後に改善すべき点と今後の研究について。本研究ではブースの1つ1つを別々に見ていったが、実際にはブースは何も無い空間に浮かんでいる訳ではなく、隣のブースや通路との関係の上に存在している。そのため、ブース内に形成される個人的領域も、周囲の環境から影響を受けていると考えるのが妥当であるが、今回の研究ではそこまで到達できなかった。また第1章で定義したように、パーソナライゼーションには構築された物理環境の他に、行為自体としての側面があり、そちらの側面に着目した分析も当然考えるべきである。以上を踏まえて、今後は調査や実験の方法を洗練させ、どうすればより実証的な分析を展開する事が出来るのかを検討する必要があると考えている。

参考文献

- 1) 今井 正次：小児の病室における家具の「レイアウト実験」 テリトリーからみた病室計画に関する研究，日本建築学会計画系論文集，2003 年，pp.147 ～ 154
- 2) 橋 弘志：個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，1997 年，pp.133 ～ 138
- 3) 三浦 研：災害復興住宅における個人領域の形成に関する調査研究 93 年北海道南西沖地震の被害を受けた奥尻島の事例を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，1997 年，pp.177 ～ 180
- 4) 木原 良太：「ワンルーム型」住居における家具配置と生活行為の実態調査 都市と住居に求められる生活機能と役割に関する研究（その 3），日本建築学会大会学術講演会梗概集，2002 年，pp.471 ～ 472
- 5) 橋本 都子：「ワンルーム型」住居の家具配置と生活領域 都市と住居に求められる生活機能と役割に関する研究（その 4），日本建築学会大会学術講演会梗概集，2002 年，pp.473 ～ 474
- 6) 花田 陽一：オフィスにおける個人作業領域の決定要因と物理的環境が与える影響 個人作業領域解析システムの開発と適用，日本建築学会大会学術講演会梗概集，2007 年，pp.551 ～ 552